

松本市文化財調査報告 No.165

長野県松本市

AGATAMACHI

# 県町遺跡XII

——緊急発掘調査報告書——



2003.3

松本市教育委員会

長野県松本市

*AGATAMACHI*

# 県町遺跡XII

—緊急発掘調査報告書—

**2003.3**

松本市教育委員会

## 序

---

県町遺跡は松本市の中央部に位置し、市街地へ向かって流れる薄川の右岸、県一帯に拡がる遺跡です。本遺跡は昭和55年のあがたの森公園整備に伴う発掘調査に始まり、それぞれの開発に先立って過去11回の調査が行われております。

今回は長野県松本県ヶ丘高等学校の体育館建替え工事が計画されたため、松本市が同校から委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施したもので、同校内の調査としては5か所目となります。

発掘調査は平成13年11月から14年3月にかけて行われました。冬期間の厳しい調査となりましたが、関係の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、弥生時代から中世にかけての、さまざまな時代の生活跡を発見することができました。中でも緑釉陶器や硯などの出土は特筆されます。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変重要な資料になることと思われます。

しかしながら、発掘調査をして記録保存することは、遺跡を破壊しているという側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされるのは大変貴重なことだと思います。

最後になりましたが、厳しい寒さのなか発掘調査にご協力をいただいた参加者の皆様、また調査に際しては多大なご理解とご協力をいただいた、長野県松本県ヶ丘高等学校の皆様、地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

松本市教育委員会 教育長 竹淵 公章

# 例 言

- 1 本書は、平成13年11月19日から平成14年3月25日にかけておこなわれた、松本市県2丁目1番1号に所在する県町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は松本市ヶ丘高校が体育館を建替えるのに伴って松本市教育委員会がおこなったものである。
- 3 本遺跡は平成13年度に発掘調査を行い、平成14年度に報告書の作成を実施した。
- 4 本書の執筆分担は次の通りである。  
第1章：事務局  
第2章第1節：森 義直  
第3章第2節：清水 究  
第3章第3節第2項：太田圭郁  
第3章第3節第3項：内堀 団  
上記以外：澤柳秀利
- 5 本書の作成・編集にあたっての作業分担は次の通りである。  
遺物洗浄接合：五十嵐周子、内澤紀代子、百瀬二三子  
土器・陶磁器実測：竹内直美、竹平悦子、松尾明恵、八坂千佳  
土器・陶磁器トレース：太田万喜子、久保田瑞恵  
石器実測：太田圭郁、堀 久士  
石器トレース：太田圭郁  
金属製品保存処理：洞澤文江  
金属製品実測：内堀 団  
金属製品トレース：内堀 団  
遺構図調整・整理：石合英子、澤柳秀利、清水 究  
遺構図トレース：太田万喜子、久保田瑞恵、澤柳秀利  
図版組み：石合英子、澤柳秀利、清水 究  
写真撮影：(現場写真) 澤柳秀利、清水 究  
(遺物写真) 宮嶋洋一  
(航空写真) 株式会社 共同測量社  
総括・編集：澤柳秀利
- 6 本書の中で使用した遺構名の呼称は次の通りである。  
第1号住居址→1住 第1号掘立柱建物址→1建 第1号土坑→1土 第1号ピット→P1  
第1号竪穴状遺構→1竪 第1号溝址→1溝 第1号流路址→流路1 第1号集石→集石1  
遺物包含層調査におけるグリッド番号の呼称は、そのグリッド北西隅の座標を用いている。
- 7 土器・陶磁器の実測図において断面図の白抜きは弥生土器及び土師器で、(古)は古墳時代土器を表す。スミ塗りは須恵器、陶器、磁器で、(緑)は緑釉陶器、(青)は青磁、(白)は白磁、(NS)は軟質須恵器、(K)は灰釉陶器、(陶)は陶器を表し、表示のないものは須恵器である。
- 8 本遺跡の調査及び本書の執筆・作成にあたって松本市ヶ丘高等学校風土研究会にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
- 9 本調査における出土遺物及び現場で作成した測量図、写真等の諸記録は松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館に保管・収蔵されている。(松本市立考古博物館 〒390-0823 長野県松本市大字中山3738番地1 TEL0263-86-4710)

# 目次

序	
例言	
目次	
第1章	調査の経緯 ..... 4
1.	調査に至る経過 ..... 4
2.	調査体制 ..... 4
第2章	遺跡の環境 ..... 6
第1節	遺跡の立地と地形・地質 ..... 6
第2節	歴史的環境 ..... 7
第3章	調査結果 ..... 10
第1節	調査の概要 ..... 10
第2節	遺構 ..... 13
1.	竪穴住居址 ..... 13
2.	掘立柱建物址 ..... 17
3.	土坑 ..... 17
4.	ピット ..... 18
5.	竪穴状遺構 ..... 18
6.	集石 ..... 18
7.	溝・流路址 ..... 18
第3節	遺物 ..... 29
1.	土器・陶磁器 ..... 29
2.	石器 ..... 48
3.	金属器 ..... 50
第4章	調査のまとめ ..... 61
写真図版	

## 図・表目次

### 図目次

第1図	土層概念図 ..... 6
第2図	遺跡の範囲と周辺遺跡 ..... 8
第3図	調査範囲図 ..... 9
第4図	遺構配置図(1・2面) ..... 11
第5図	遺構配置図(3・4面) ..... 12
第6～10図	竪穴住居址図 ..... 21
第11図	竪穴住居址・掘立柱建物址・竪穴状遺構・溝 ..... 26
第12～13図	土坑 ..... 27
第14～21図	遺物実測図(土器・陶磁器) ..... 40
第22図	出土石器 ..... 49
第23図	金属器実測図 ..... 50
第24図	基本土層(東トレンチ西面、136住周辺部分) ..... 62

### 表目次

第1表	県町遺跡住居址一覧表 ..... 19
第2表	県町遺跡竪穴状遺構一覧表 ..... 19
第3表	県町遺跡溝址・流路址一覧表 ..... 20
第4表	県町遺跡土坑一覧表 ..... 20
第5表	出土土器観察表 ..... 35
第6表	遺構主要諸元一覧 ..... 48
第7表	遺物主要諸元一覧 ..... 48
第8表	遺構略号一覧 ..... 48
第9表	実測図掲載固体属性一覧 ..... 48
第10表	器種一覧 ..... 48
第11表	石材略号一覧 ..... 48
第12表	石材単位器種組成 ..... 48
第13表	遺構単位石材組成 ..... 49
第14表	遺構単位器種組成 ..... 49
第15表	主要諸元一覧 ..... 50
第16表	遺構金属種別単位所謂器種 ..... 50

# 第1章 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯

平成12年度に実施した公共事業照会の中で、長野県松本県ヶ丘高等学校において大体育館の建替え事業が計画されていることが明らかとなった。同校を含む一帯には、周知の埋蔵文化財包蔵地である県町遺跡があり、過去11回の発掘調査が行なわれ、多数の遺構遺物が発見されている。そこで、松本市教育委員会では同校並びに長野県教育委員会高等教育課と県町遺跡の保護について協議した。その結果、既存体育館が解体された後、事業に先立って緊急発掘調査を実施し記録保存を図ることとなった。

発掘調査の実施にあたっては、同校から松本市が委託を受け、現場での発掘調査、整理作業及び調査報告書の刊行等の業務は松本市教育委員会が行うこととした。委託契約は平成13年8月27日付で締結し、同年11月19日に発掘調査を開始した。本調査は生活面が複数である上、遺構密度が高い集落であったため、長期間の調査となったが、平成14年3月25日をもって現場作業を終了した。

整理作業及び調査報告書の刊行については、平成14年4月15日付で前年度と同様に委託契約を締結し、平成15年3月20日をもってすべての業務を終了した。

## 2 調査体制

### (1) 調査団

**調査団長** 竹淵公章（松本市教育長）

**調査担当者** 澤柳秀利、清水究（文化課）

**調査員** 松尾明恵、宮嶋洋一、森義直

**協力者** 飯田三男、五十嵐周子、石合英子、井上直人、今村克、入山正男、内澤紀代子、久保田登子、河野清司、清水陽子、下島和代、竹内直美、竹平悦子、田中一雄、中村恵子、中村美ゆき、林和子、廣田早和子、福島勝、布野行雄、布野和嘉夫、布山洋、洞沢文江、待井敏夫、宮田美智子、百瀬二三子、八坂千佳、矢崎寛子、山崎照友、渡辺順子

### (2) 事務局

松本市教育委員会教育部文化課

有賀一誠（課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同、～平成14年3月）、田口博敏（同、平成14年4月～）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、渡邊陽子（嘱託）、塚原祐一（同）

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 県町遺跡の地形・地質

#### 調査地の立地

本県町遺跡は松本盆地の南東部にあり、東部山地から西流する薄川によって形成された扇状地上で北西に緩く傾斜しており標高598m～602mの間にある。位置は旧松本市街の東端で薄川へは南へ400m、女鳥羽川の清水橋へは北西へ約700mの地点にある。東には2～3kmで美ヶ原から続く第三紀層の筑摩山地があり、西側は奈良井川、梓川を越えて15kmほどで西山の中古生層から成る飛騨山地に至る。県町遺跡の発掘は既に第11次まで行われており、今回の発掘は今迄の発掘のうち最も東端の標高600～602mの間である。

#### 周辺の地形・地質

本調査地を含む広大な松本盆地は、洪積世中期に起きた造盆地運動で誕生した構造性の盆地で、糸魚川～静岡構造線とほぼ平行な東・西の山麓線沿いの大断層と、それを横切る東西方向の断層により生じた南北に長い盆地であり、西と南は飛騨山地の中古生層とそれに貫入した火成岩類よりなっている。東部～東北部は1000m～2000mのほぼ南北に連なる筑摩山地で、第三紀層とそこに貫入や噴出した火成岩類よりなっている。

調査地に関係のある盆地の南半分を占める主な堆積物は、飛騨山地を解析し南西方向から流入する鎮川・奈良井川・田川などによる扇状地堆積物であり、これ等が合して複合扇状地を形成し、緩く東北部に傾斜している。

梓川系の砂礫層の東端は、清水付近まで到達していることがボーリングの結果判明している。

一度誕生した盆地の中に、その後洪積世後期になって松本市の旧市街地付近に局部的な構造（断層）性盆地の形成が始まり、同時にその西部が傾動しながら隆起を始めて、それまで大口沢方面へ流れていた女鳥羽川が城山方面に流れをかえ、砂礫を第三紀層の上に載せ更に隆起の進行によりそこは城山となり、流路は東へ押しやられて現在に至っている。

この旧市街地付近に誕生した局部的盆地を埋める主役は、北からの女鳥羽川と東からの薄川である。

女鳥羽川は三才山峠(1500m)から流れ出す本沢を始め、幾つもの沢を合して西に向かって流れ、稲倉付近で流れを南にかえ、流路の首振りにより稲倉を扇頂として南に広がる扇状地を形成している。薄川は市街地の東部、三峰山や那岐峠付近を源流として幾つかの沢と合流して西流し、入山辺地区の西端付近を扇頂として西に広がる扇状地を形成している。この両者は湯川付近で接し、市街地方面に複合扇状地を形成している。この局部的盆地は沈降による沼地の時代があり、そのため、その影響を引き継ぎ停滞水地特有のヨシやガマなど、湿地性植物の腐食に富む漆黒色の粘土層が、地下30mまでの間に何層も存在していることが、過去のボーリングの結果知られている。

伊勢町及びその周辺の発掘から、1.6mm/年～1.7mm/年の速さで土砂が堆積しており、これは新村～穂高にかけての松本盆地の中心部での堆積速度が1mm/年ほどであるので、現在も松本駅前付近から松本城付近にかけてゆっくりと沈降が続いているものとみられる。

#### 県町遺跡の地形・地質の変化について

県町遺跡は薄川扇状地の中程にあり、扇状地は流路が周期的に首を振るることによって形成されるので、弥生以後県町の遺跡の遺存状態と堆積状態を見ると、およそ次の3通りに分類できる。

#### [1] 本流まで遠く、洪水に対して安定な時期

この様な環境では腐食土層ができる。県町遺跡の弥生時代がこれに該当する。I～III次発掘地点では弥生の鍵層である腐食土層が多く残っているがIV次以降の発掘地点は、本流又は支流などで弥生の腐食土層の多くは流出している。

#### [2] 本流又は支流に洗われた時期

この場合は、流理構造を有する砂層または、ふるい分けのよい砂礫層となっており、その場にあった遺構の上部又は全てが下流に運ばれている。

#### [3] 本流が近くを流れており、しばしば大洪水による堆積物の入れ代り（今まであった土層は下流に流され、上流にあった土層が新たに堆積）が行われた時期

県町遺跡では、この[3]が最も多く、ふるい分けの極めて悪い汚い塊状の堆積物である。

県町の古墳時代以後の遺構は、[2]と[3]によってできた小起伏の激しい地形から、雨水や小流によって洗い出されて凹部を埋め、緩い起伏を形成しそこに各時代の生活が営まれたとみられる。

### 今次発掘地点の地形・地質の変化について

県町遺跡の最東端、標高600~602mのごく緩やかに西傾斜した建築物跡である。土層は今迄の発掘のうちで最も激しく複雑に変化しており、中々全体像がつかみにくいで、土層概念図でおよその状態を示すと第1図のようになる。

土層の堆積は上層においては、およそS-60°-E方向からN-60°-W方向に向かってドミノ倒し状に、西側が古く東ほど新しく重なっており、洪水時には上流の地表面で風化しサビた砂礫を押し流しながら本地点を襲い、堆積物や遺構を多かれ少なかれ削って下流（西方）に送り、代って上流からふいり分けの悪い礫土が堆積している。多少の安定期には洪水層から洗い出された砂土が凹部をレンズ状に埋め、そこに9C以後の生活面や遺構が存在する。

発掘地点の西側隣の微高地は、度重なる洪水にも削り残され、弥生の遺物が存在し、弥生時代この微高地は住居以外何等かの目的で使われた可能性がある。

### 礫の岩質

第三紀のフォッサマグナ堆積物とそれに貫入した火成岩類から成る筑摩山地を侵食、運搬してきた礫であるので、安山岩、珩岩、石英閃緑岩、石英斑岩、砂岩などであり、山地で多い泥岩はこの地点に達するまでに風化して土壌化している。泥岩について風化しやすいのは、砂岩と安山岩であり、砂土やシルト質土層となっている。

### 居住地としての本遺跡について

薄川のような出水率の大きな河川は、洪水時土砂の流出が多いため、短年月のうちに天井川化し、より低いほうへ流路が移りこのため必然的に流路が首を振り、奈良時代以後の薄川主流を、今迄の県町遺跡の発掘調査や現在残っている微地形などから推定すると下記ようになり、度重なる洪水で土砂が堆積し自然堤防ができると、入山辺地区南方付近やそれより下流で流れを北側の流路に変え、県町遺跡の北側をかすめて、当時低湿地であった駅前通り付近で川幅を広げ、田川に流入することもあったとみられる。

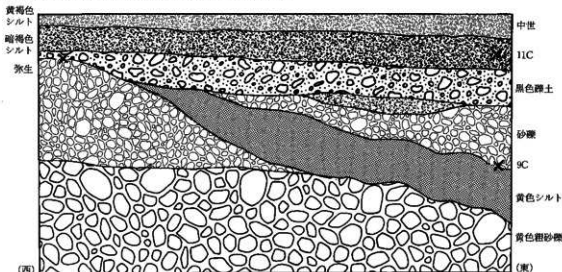
### 南方の北側



このような場合立地上県町遺跡は、大なり小なり洪水の洗礼を受けざるを得なかったことになる。このようにしばしば洪水の害のある所に、何故住居を作ったかという点については、

- ① 西に行く程低湿地で住居に適さないため。
- ② 近くに重要な役所？があり居住せざるを得なかった。
- ③ 数十年以上洪水の安定期があれば、被害の恐ろしさを忘れるため。

などいろいろ推定はできるが、②が氣になるところである。



第1図 県町遺跡12次 土層概念図



## 第2節 歴史的環境

果町遺跡は、現在の行政区画では松本市東、中央、埋橋及び大字里山辺にかけて存在する遺跡である。

前節でも述べた通り、この地区の歴史を語る上で欠くことの出来ない要素として薄川がある。この薄川は、現在でこそしっかりした堤防によって治水されているが、古来より知られる暴れ川で、戦後にいたるまで氾濫を繰り返してきている。したがってこのあたりでは縄文時代及びそれ以前の遺跡はほとんど確認されていない。この上流の林城山西麓の林山腰遺跡では、縄文時代中期の集落が確認・調査されている。

弥生時代については、果町遺跡は著名な遺跡である。昭和54年度以降行われている11次にわたる調査の、主にあがたの森公園造成に伴うものからは住居址44軒の他、多くの遺構が確認されており、遺物の量も多く、この地域を代表する弥生時代の遺跡として知られている。今回の調査でも、薄川の影響を受けながらも、少しではあるが弥生時代の遺構・遺物が確認されている。

古墳時代には、律令制度以前の地方行政の首長としての県首（あがたのおびと）に関連すると考えられている県という地名に関わる可能性や、県塚古墳（1～2号）との関連について考える必要があるが、現在までの調査では、当該期の住居址は4軒確認されているだけである。この地域の古墳時代を解明していく上で主要な遺跡であると考えられるわけであるが、不明点が多いといわざるを得ない。

奈良・平安時代になると、この遺跡は緑釉陶器を多く出土する遺跡として知られてくる。本格的な調査は先述の昭和54年度まで行われなかったが、それ以前にも古くは大正期に、旧制松本高等学校や県ヶ丘高校（旧制松本二中）建設に伴って遺物が出土していることが知られ、その中には緑釉陶器も多く含まれている。また戦後には、松本県ヶ丘高校の校舎などの建替に伴って緑釉陶器が出土している。調査によるものとしては、42軒の住居址、1軒の掘立柱建物址が確認されている。また県ヶ丘高校の西、大蔵省（現財務省）公務員宿舎建設に先立つ11次調査では風字硯の他、皇朝十二銭の一つ隆平永寶が出土している。こうしたことから、奈良・平安時代には、このあたりに有力な集落が存在していたことを示し、今回調査の結果出土した緑彩文陶などは、更にそれを裏付ける資料であるといえる。またこの地域の周辺には、古くから研究者によって信濃国府が存在したとされる推定地がいくつかあり、それとの関連についても考えていかなければならない遺跡であるといえる。

中世になると、律令制度の衰退とともに、古代には有力な集落であった果町も衰退していったと考えられている。鎌倉・室町時代については文書資料も少ないため、この辺りについての様相は不明点が多い。しかし今回の調査では、建物址などの具体的な遺構こそ見つからないものの、渡来銭（北宋）や銅貨を出土する土坑などの他、区画溝とみられる直線状の溝も検出されていることから、後世の整地などによって多くは失われているが、中世においても何らかの形で生活の痕跡があったと考えられる。

近世以降、このあたりは松本藩領として、庄内組埋橋村に組み込まれる。この県の地名に関わるともされる果明神がこの村内の果塚（果塚1号古墳）を境内に含む形で置かれる。また県ヶ丘高校の北側には、通称お塚と呼ばれる、近世松本城主であった戸田家の廟所が造られており、現存している。

近代になり、この辺りは大正期には文教地区として変貌を遂げてくる。大正8年に旧制松本高等学校（信州大学の前身）が招致され、果明神は南に移転（現在地県3丁目4番）し、境内は果塚を除いて造成され、高校敷地に変った。その造成に際して土師器などが出土したことは先に触れた。また大正12年に旧制松本第二中学校（現松本県ヶ丘高校）がその北東に建設された。この工事に際しても土器がたくさん出土しているようである。

戦後の学制改革により、旧制松本高等学校は信州大学となり、市内北部の旭へと移転した。その跡地は大学寮、旧校舎以外は空き地となっていたが、昭和54年にあがたの森公園として整備され、現在に至っている。またこれらの周辺は、松本市内郊外の住宅地として、宅地化が進んでいる。

参考文献：松本市 1993 『松本市史 第二巻 歴史編1-1』

：松本市 1993 『松本市史 第四巻 旧市町村編1-1』

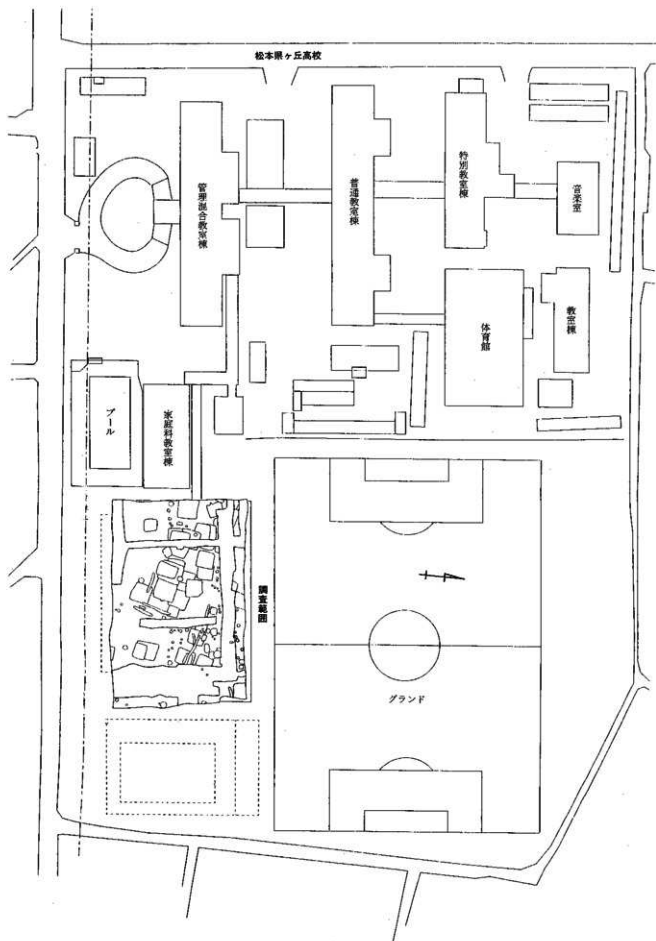
：東京学芸大学 松本市 塩尻市 郷土資料編纂会 1973 『東京学芸大学 松本市 塩尻市誌 第二巻 歴史上』



●印：今回調査地点

- 1：元原遺跡 2：大輔原遺跡 3：大村立石遺跡 4：大村前田遺跡 5：沢村北遺跡 6：塚田遺跡 7：沢村遺跡 8：横田遺跡  
 9：岡の宮遺跡 10：惣社遺跡 11：田町遺跡 12：横田古屋敷遺跡 13：新井遺跡 14：宮北遺跡 15：片端遺跡  
 16：堀の内遺跡 17：下原遺跡 18：女鳥羽川遺跡 19：四ッ谷遺跡 20：丸の内遺跡 21：大名町遺跡 22：兎川寺遺跡  
 23：荒町遺跡 24：土居尻遺跡 25：針塚遺跡 26：泉町遺跡 27：北小松遺跡 28：伊勢町遺跡 29：本町南遺跡  
 30：天神西遺跡 31：埋橋遺跡 32：林山腰遺跡 33：筑摩北川原遺跡 34：筑摩遺跡 35：筑摩南川原遺跡  
 36：千鹿頭北遺跡 37：御符遺跡 38：三才遺跡 39：神田遺跡 40：林遺跡 41：小島遺跡 42：国司塚遺跡 43：桃仙園古墳  
 44：御母家(1~2)古墳 45：車塚古墳 46：泉塚(1~2)古墳 47：大塚(1~2)古墳 48：針塚古墳 49：北川原古墳  
 50：巾上古墳 51：御符古墳 52：林城(大城) 53：林城(小城)

第2図 遺跡の位置と周辺遺跡



第3図 調査範囲

## 第3章 調査結果

### 第1節 調査の概要

#### 1 調査地

今回の調査地は松本市県2丁目1番1号の松本県ヶ丘高校の敷地内にある体育館予定地で、現況は旧体育館解体後の更地である。県道遺跡は、前述のとおり現在までに11次にわたる調査が昭和54年度以来おこなわれており、今回は第12次調査となる。調査対象は、新体育館の床面積1400㎡であるが、そのうち北側はグラウンド崩壊などの恐れがあるため、その部分を除いた約1200㎡について調査を実施した。

#### 2 調査方法

今回の調査にあたっては、まず重機を使用して整地層を除去している。排土置き場の関係上西側と東側と2回に分けて掘り下げた。また若干の旧体育館の基礎捨石が残っていたため、それらを除去し、土層及び遺構確認のためのトレンチとした。東側部分では4面の生活面を確認し、日程の都合上全体ではないが、一部については掘り下げ、調査を実施した。西側部分は、一部2面の生活面を確認したが、遺構を明瞭に捉えることが困難であったため、グリッド調査を実施した部分もある。磁北を基準とし、全体図のN、S、E、Wは方位を表す。また数字は基準点からの距離を示している。遺構番号は、住居址、掘立柱建物址については第11次調査の番号を継承し、堅穴状遺構、土坑、溝については12次調査ということで1201から付している。ピット、集石遺構、流路は1から付している。

#### 3 遺構

住居址37軒、土坑49基、ピット69個、掘立柱建物址1棟、堅穴状遺構2基、集石遺構3ヶ所、溝址5条、流路址4条が検出されている。

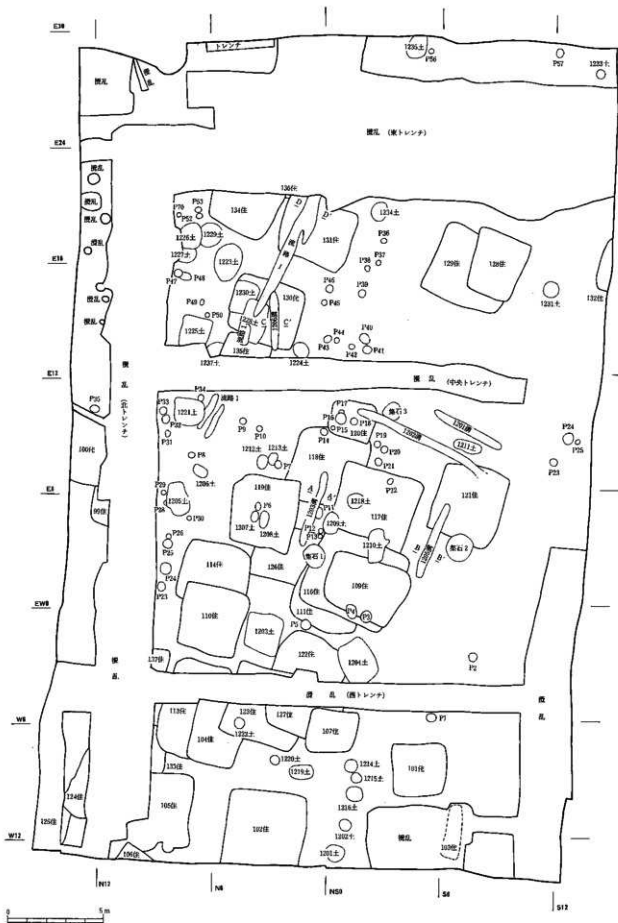
住居址を含む多くの遺構が平安時代に属すると考えられるが、中世に属する遺構も確認されている。一部弥生時代の遺構も出土する遺構もみられる。土坑の用途については不明であるが、ゴミ穴的に使用されたものとみられるものもある。ピットは、掘立柱建物址を構成するもの以外についての用途は不明である。流路は、薄川の氾濫及び一時的な本流とみられる。溝は、何らかの区画溝とみられる。

#### 4 遺物

弥生時代から平安時代、中世にかけての遺物が出土している。弥生時代の遺物は、甕あるいは台付甕を中心に、101住より出土がみられ、あがたの森公園造成に伴う調査によって確認されている弥生時代の遺構がこの辺りまで広がっていたことを示唆する資料となりうるものである。平安時代以降の遺物は、土器・陶磁器では須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器の杯・椀といった食膳具、土師器甕・小型甕・甔といった煮炊具、また緑釉陶器、白磁といった高級陶磁器片が出土している。金属製品は、北宋からの渡来銭を主体とした銅銭、引引金具、紡錘車といった生活具、また刀子、釘、鉄鎌が出土している。石器では磨製石鎌などがみられる。特殊遺物としては緑彩文陶、緑釉陶器三足盤、白磁といった高級陶磁器の他、水晶製鈴帯、風字礎といった官衙などに関連するとみられる遺物が出土している。

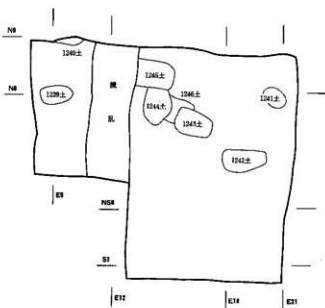
#### 5 基本土層 (62ページ第24図：東トレンチ西面、136住周辺部分)

地形・地質については前述したが、本調査区の表土下は、全面ではないがよく締まった黄褐色砂質土 (I) が堆積しており、ここに中世の遺構が存在する (第1検出面)。I層下部からは134住などの遺構が検出されている。その下層は礫層 (XII) 或いは暗褐色粘質土の面が広がり、平安時代の他、一部洪水の直撃を免れた弥生時代の面が残存する (第2検出面)。礫層は薄川の影響とみられ、何層か (IX、XI、XII、XIII他) に分かれる。そのうち北西部において、2層みられるうちの下の礫層 (XII) 上面には、平安時代末の遺構が存在する (第3検出面)。北西部の、礫層下にある黄褐色砂質土層 (XIV) の上面には平安時代前期の遺構が存在する (第4検出面)。全般的に薄川流路の影響を強く受けており、その結果、一部では古い時代の遺構が上層から確認され、新しいものが下層から確認されるという、通常とは異なる遺構検出が行われた要因となっている。

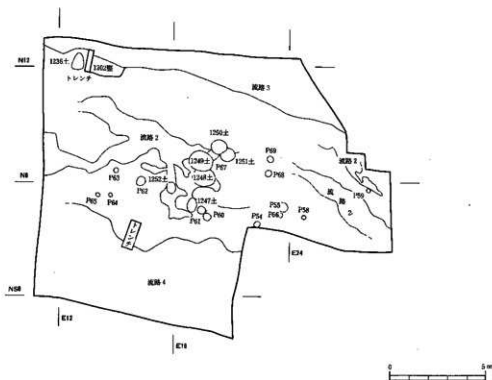


第4図 遺構配置図(第1・2面) S=1:200

第3面



第4面



第5図 遺構配置図(第3・4面) S=1:200

## 第2節 遺構

### 1 竪穴住居址 (第5～11図、第1表)

#### 第99号住居址 (第6図)

北地区で検出した。南側の大半は攪乱によって消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は暗褐色粘質土で硬く締まっている。壁は北側でよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。覆土中には、礫がまとまった形でみられる。遺物は黒色土器杯・碗・小型甕、灰釉陶器皿・段皿、須恵器蓋がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第100号住居址 (第6図)

北地区で検出した。北側は調査区外にかかり、東及び南側は攪乱によって消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土で硬くない。壁は西側の一部で残存しほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが黒色土器杯・碗がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

#### 第101号住居址 (第6図)

西地区南部で検出した。ピットは3個確認したがいずれも掘り込みは浅く、柱穴とは考えない。床面は茶褐色砂質土であり硬くなく、2ヶ所のテラス状部分がある。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は少ないがピット中より弥生土器甕或いは台付甕が2点出土している。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代中期末に属すると考えるが、炉が確認できないため住居址ではない可能性がある。

#### 第102号住居址 (第8図)

西地区中央部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。床面は暗褐色砂質土で硬く締まっている。覆土上層で人頭大の礫がまとまってみられたため、当初は2軒の切り合いであると考えたが、遺物の時期などから1軒と判断した。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物としては、土師器、黒色土器の杯・碗といった食膳具の他、土師器の甕・小型甕といった煮炊具、貯蔵具がみられ、図化し得たものだけで31点を数える。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

#### 第103号住居址 (第6図)

西地区南部で検出した。本址の北側は大半が攪乱によって消滅しており、ピット、カマドは確認できず、またプランも不鮮明である。床面は黄褐色砂質土で硬くない。壁は南側の一部でやや緩やかに立ち上がる。遺物は少ないが須恵器杯Aなどがみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第104号住居址 (第7図)

西地区北部で検出した。本址の東側中央部にて石組粘土カマドを確認したが、一部攪乱を受けており全容は不明である。ピットは確認できない。床面は黄褐色粘質土で硬く、貼り床となっている。壁は緩やかに立ち上がる。覆土中には、礫がまとまった形でみられる。遺物はあまり多くないが、土師器碗、須恵器杯等の食膳具の他、鉄釘、また特殊なものとして緑彩文陶底部が出土している。本址の時期は、遺物及び切り合い関係から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第105号住居址 (第6図)

西地区北部で検出した。ピットは確認できない。カマドは西壁中央より検出した粘土カマドであるが、残存状態はあまり良好ではない。床面は黄色粘質土で貼り床となっており硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物としては、黒色土器杯・碗、灰釉陶器碗・皿、須恵器杯・蓋、土師器甕・小型甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第106号住居址 (第7図)

西地区北部で検出した。西側の大半は調査区外で、東側の一部のみを確認した。ピットは1個確認したが柱穴と判断できない。カマドは確認することはできなかった。床面は黒褐色粘質土で硬く締まっている。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は判然とせず、切り合い関係から判断して古代7期以降、9世紀中頃の平安時代前期以降に属する遺構であるとしかいいない。

#### 第107号住居址 (第7図)

西地区東部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。当初は2軒の住居址に分かれると考えたが、プラン及び遺物から1軒であると判断した。覆土は2層に分かれる。床面は焼土粒、炭化物混じりの茶褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・碗・盤、黒色土器碗、灰釉陶器段皿といったのがみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代13期、11世紀中頃の平安時代後期に属すると考える。

#### 第109号住居址（第8図）

中央地区中央部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドは西壁北隅の石組粘土カマドでよく残存している。壁はよく残存し、緩やかに立ち上がる。床面は暗茶褐色砂質土であまり硬くない。一面に炭化材が多量にみられるため焼失した住居である可能性がある。遺物としては黒色土器杯・碗、軟質須恵器杯、灰釉陶器皿、土師器壺がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

#### 第110号住居址（第9図）

中央地区北部で検出した。全体的に大形の礫が存在する。ピットは2個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは石組粘土カマドが東壁中央で確認された。またそれに伴う焼土が全面に存在する。床面は茶褐色砂質土で硬く締まっている。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は多く、黒色土器杯・碗・鉢、須恵器杯、軟質須恵器杯、土師器鉢・壺がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第111号住居址（第8図）

中央地区中央部で検出した。ピットは3個確認され、その位置から柱穴とみられる。カマドは西壁中央で確認した粘土カマドであるが、焼土範囲が確認できる程度である。床面は暗茶褐色粘質土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は、土師器壺、須恵器杯・蓋、灰釉陶器碗、また東海系施釉陶器がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第113号住居址（第7図）

中央～中央西地区北部で検出した。本址中央部は攪乱によって消滅している。ピットは1個確認したのみで、柱穴と判断できない。カマドは確認できなかったが、東壁中央部床面に焼土の広がりが見られるため、この部分に存在した可能性はある。床面は黄褐色砂質土でやや硬く、床下から土坑2基を検出した。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが、黒色土器杯・碗、須恵器杯がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第114号住居址（第9図）

中央地区北部で検出した。ピットは1個確認したが、柱穴と判断できない。カマドは東壁中央で確認された石組粘土カマドである。覆土中には、大形の礫が含まれる。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は黒色土器杯・皿、須恵器杯・壺がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第115号住居址

西地区、104号住居址の周辺において遺物の散布及びカマドと考えられる焼土範囲を確認したため、これを住居址と考えた。しかし遺構として捉えることはできず、欠番とした。遺物として土師器杯が出土している。104住上面に異なる時期の、古代14～15期、11世紀末～12世紀の平安時代後期に属する遺構が存在したとみられる。

#### 第116号住居址（第8図）

中央地区中央部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドも確認できなかったが、東壁中央部に焼土範囲が存在することから、それがカマド残痕である可能性がある。床面は茶褐色砂質土で硬く締まっている。壁はあまり残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物は、土師器杯・壺、須恵器長頸壺、軟質須恵器杯、灰釉陶器碗、また土師器円筒型土器がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

#### 第117号住居址（第8図）

中央地区中央部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドは東壁中央で確認した石組粘土カマドで残存状況は良い。覆土中には人頭大の礫がまとまった形で含まれる。床面は黄褐色粘質土で硬く、貼り床となっている。床下にはピットがみられる。壁はよく残存し緩やかに立ち上がる。遺物は多く、土師器壺・小型壺・円筒型土器、黒色土器杯・皿・碗・鉢、須恵器杯・蓋・碗・壺で、図化し得るものだけで40点を数える。金属製品では紡錘車、穿引具がみられる。特殊遺物として緑釉陶器三足盤脚部が貼り床下から出土している。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第118号住居址（第7図）

中央地区東部で検出した。ピット、カマドは確認できない。床面は小礫混じりの褐色砂質土で硬い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器小型壺、黒色土器碗、須恵器杯、灰釉陶器碗がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考えられる。

#### 第119号住居址（第8図）



中央地区中央部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。床面は小礫混じりの茶褐色粘質土で硬い。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は多くないが、土師器杯・甕がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代14期前後、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

#### 第120号住居址（第7図）

中央地区東部で検出した。ピットは5個確認され、そのうちのP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>の4個は、その位置からみて柱穴であると考えられる。カマドは確認できなかった。床面は茶褐色砂質土で硬い。壁はほとんど残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

#### 第121号住居址（第10図）

中央地区南部で検出した。ピットは5個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは東壁北隅で検出された粘土カマドであるが、残存状態は良好ではない。覆土中には礫がまとまった形で多く含まれる。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はあまり残存しない。遺物は、土師器杯・碗・甕・壺、灰釉陶器碗がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代15期、12世紀前半の平安時代後期に属すると考える。

#### 第122号住居址（第9図）

中央地区西部で検出した。西側の一部は攪乱により消滅している。ピットは2個確認したが、柱穴かどうかは不明である。カマドは東壁中央で確認された石組粘土カマドである。床面は一部が暗褐色粘質土の貼り床となっている他は黄褐色砂質土で硬く締まっている。壁はあまり残存せず緩やかに立ち上がる。遺物は多く、土師器甕・小型甕、黒色土器杯・碗・皿・鉢、須恵器杯・長頸壺、土師器円筒型土器で、図化し得るものだけで32点を数える。金属製品では刀子がある。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第123号住居址（第10図）

中央～中央西地区北部で検出した。本址中央部は攪乱によって消滅している。ピットは確認されなかった。カマドは西壁中央で確認された石組粘土カマドである。床面は茶褐色砂質土で硬い。壁はあまり残存しないが、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器甕、黒色土器杯・碗・皿、須恵器長頸壺の他鉄鍬がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第124号住居址（第11図）

北西地区で検出した。南側の大半は攪乱により消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は茶褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

#### 第125号住居址（第11図）

北西地区で検出した。南側の大半は攪乱により消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は暗褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが、黒色土器杯・碗がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代7～8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

#### 第126号住居址（第10図）

中央地区中央部で検出した。東側の一部が調査区外にかかる。ピット、カマドは確認できなかった。覆土中には、中央部に人頭大の礫がまとまった形で存在する。床面は地山の暗褐色礫層で硬い。壁はあまり残存しないが、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが、土師器杯・碗、黒色土器杯・碗等がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

#### 第127号住居址（第9図）

西地区東部で検出した。東側の一部は攪乱により消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は茶褐色砂質土及び一部地山の礫層で硬い。壁はあまり残存しない。遺物は少ないが、土師器杯・小型甕、須恵器杯A等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

#### 第128号住居址（第10図）

中央東地区南部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。覆土上層には礫がまとまって存在している。床面は地山の暗褐色礫層で硬い。壁はあまり残存せず緩やかに立ち上がる。遺物は少ないが土師器甕、黒色土器皿がみられた。本址の時期は、遺物及び切り合い関係から判断して古代8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

#### 第129号住居址（第10図）

中央東地区南部で検出した。ピットは3個確認され、そのうちP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>がその位置などから柱穴とみられる。カマドは東壁中央部にある石組粘土カマドであるが残存状態は良好ではない。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はあまり残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・甕、黒色土器杯、須恵器杯、軟質須恵器杯の他、特殊品として紫水晶

製銚帯（巡方）がある。本址の時期は、遺物から判断して古代7期、9世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

#### 第130号住居址（第10図）

中央東地区西部で検出した。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられないが、渡米銭（熊享元寶）が出土している。本址の時期は、遺物から判断できず判然としないが、中世に属するもの可能性がある。

#### 第131号住居址（第11図）

中央東地区東部で検出した。東側の一部は掘乱により消滅している。ピットは4個みられたが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

#### 第132号住居址（第10図）

中央東地区南端で検出した。南側の大半は調査区外にかかる。ピットは1個確認したが、柱穴と断定できない。カマドは確認できなかった。床面は暗褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ちあがる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

#### 第133号住居址（第10図）

西地区北部で検出した。北側の大半は掘乱により消滅している。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色粘質土でやや硬い。壁はほとんど残存しないが、ほぼ垂直に立ちあがる。遺物は少なく、黒色土器杯等が若干みられる。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

#### 第134号住居址（第11図）

中央東地区東側で検出した。ピットは3個確認したが、位置及び規模からみて柱穴とは考えられない。またカマドは確認できなかった。床面は茶褐色粘質土で硬く締まっている。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は少なく、須恵器杯蓋B等が若干みられたが混入と考える。本址の時期は遺物のみから判断しがたい。

#### 第135号住居址（第10図）

中央東地区西側で検出した。西側の一部は掘乱により消滅している。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色砂質土及び一部地山の礫層で硬い。壁は、残存部ではしっかりとした垂直な立ち上がりを確認した。遺物は少ないが、土師器杯、朱墨痕のある灰釉陶器碗、また金属製品として刀子がみられた。本址の時期は、遺物が少ないため判然としないが、古代14期前後、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

#### 第136号住居址（第11図）

中央東地区東部で検出した。東側の大部分は掘乱により消滅している。ピットは確認できない。カマドも大半が消滅しているが、西壁中央部にある石組粘土カマドで、芯石は1個残存している。床面は茶褐色砂質土で硬い。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は少ないが、土師器甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

#### 第137号住居址（第11図）

中央地区北西隅で検出した。掘乱により南東部のみ残存する。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色粘質土で硬く締まっている。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は少ない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

## 2 掘立柱建物址（第11図）

### 第3号掘立柱建物址

4面で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。切り合い関係は1249、1250土に切られる。東西1間（292～304cm）×南北1間（274～304cm）の建物址である。柱穴のうちP<sub>1</sub>（P67）からは、底部から礎板（石）が確認された。遺物の出土はみられないため本址の時期は判然としないが、検出面より判断して古代7～8期、9世紀後半の平安時代前期に属すると思われる。

## 3 土坑（第12・13図、第4表）

今回の調査では49基の土坑を検出した。しかし、用途、時期を判断できるものは少ないが、いくつかからは遺物の出土もみられる。ここでは、遺物を伴うもの、時期・用途について考えうるものの数個について述べていく。3面の土坑は、平安時代の遺物がみられるが、中世に属する可能性を有する。

### 第1203号土坑（第13図）

中央地区西部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。遺物の出土はみられなかった。本址の時期は、遺物を伴わないため判断しがたいが、中世以降に属する可能性がある。

#### 第1204号土坑 (第13図)

中央地区西部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係は122住を切る。覆土中には礫がまとまった形で多く出土しているが用途については明らかではない。遺物は土師器小型甕、須恵器杯などがみられるが、混入と考える。本址の時期は検出面から判断して中世以降に属すると考える。

#### 第1211号土坑 (第13図)

中央地区東部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はないが、1201溝と1202溝に挟まれて存在する。出土遺物はみられず、また用途についても不明であるが、覆土も2つの溝と同質であることから、これらの溝に関連する可能性がある。本址の時期は判然としませんが、中世以降に属すると考えられる。

#### 第1221号土坑 (第13図)

中央地区北東部で検出した。他遺構との切り合い関係は流路1を切る。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。遺物として、土師器杯、黒色土器碗等が出土している。本址の時期は遺物のみから判断できないが、切り合い関係から判断して、中世以降に属すると考える。

#### 第1222号土坑 (第12図)

西地区東部で検出した。他遺構との切り合い関係は104住を切る。遺物として、白磁の小壺が1点出土している。本址の用途については明らかではない。本址の時期は、遺物のみから特定することは難しい。

#### 第1223号土坑 (第13図)

中央東地区北部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。遺物としては「真」字刻書のある緑釉陶器杯1点の他、鉄釘が出土している。本址の時期については遺物が少ないため判然としませんが、中世以降に属する可能性がある。

#### 第1225号土坑 (第13図)

中央東地区北部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。掘り込みも浅く、遺構としては判然としませんが、出土遺物として渡来銭の熊率元寶、元符通寶がみられる。本址の時期は、遺物から判断して中世以降に属すると考える。

#### 第1226号土坑 (第12図)

中央東地区北部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係は1227土、1229土を切る。底面に一段低くビット状の落ち込みがある。覆土中には焼土が含まれる。遺物としては東海系施釉陶器の卸皿等の他、鉄釘がみられる。用途はゴミ穴の可能性がある。本址の時期は、中世1～2期、15世紀の室町時代に属すると考える。

#### 第1228号土坑 (第13図)

中央東地区北部で検出した。他遺構との切り合い関係は1230土、1206溝、流路1に切られる。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。遺物は、黒色土器Aの小型甕等が出土している。時期は遺物のみから判断できず不明であるが、周辺の土坑と同様、中世以降に属する可能性がある。

#### 第1242号土坑 (第13図)

3面で検出した。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。この面で検出した土坑の中では最大の規模であるが、用途は不明である。遺物として、渡来銭である明道元寶が1点出土している。本址の時期は、遺物から判断して中世以降に属すると考える。

#### 第1243号土坑 (第13図)

3面で検出した。4基連なって確認されたうちの1つで、他遺構との切り合い関係は1246土を切る。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。北西隅部分に焼土範囲がみられたが、用途は不明である。遺物は、土師器杯等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代11～12期、10世紀後半から11世紀始めの平安時代後期以降に属すると考える。

#### 第1244号土坑 (第13図)

3面で検出した。4基連なって確認されたうちの1つで、他遺構との切り合い関係は1246土を切り、1245土に切られる。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。用途は不明である。遺物は、土師器盤、灰釉陶器碗等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して、古代11～12期、10世紀後半から11世紀始めの平安時代後期以降に属すると考える。

#### 第1248号土坑 (第13図)

3面で検出した。4基連なって確認されたうちの1つで、他遺構との切り合い関係は1243土、1244土に切られる。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。用途は不明である。遺物は少なく、土師器小型甕等がみられる。本址の時期は、遺物から判断できず判然としませんが、切り合い関係から古代11期、10世紀後半の平安時代後期以降に属すると考える。

#### 4 ビット

今回の調査では69箇のビットを検出した。しかし、建物址を構成するもの(P67、P68、P54、P61)の他は用途、時期の判明できるものは少ない。P69からは、第2号掘立柱建物址のP<sub>1</sub>(P67)でみられたものと同様の礎板(礎石)が出土しているため、これは、建物址の一部である可能性がある。その他は、いくつかから遺物の出土がみられたものの、意図的に埋設したとみられるものはなく、用途について明らかにできるものはない。

#### 5 竪穴状遺構(第11図、第2表)

##### 第1201号竪穴状遺構

中央東地区東部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込み、床面は平坦で硬い。また、貼り床となっている。ビット等の施設はみられない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期、用途は不明であるが、中世の遺構である可能性がある。

##### 第1202号竪穴状遺構

4面で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込み、床面は平坦で硬い。ビット等の施設はみられない。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は判然としないが、検出面から判断して古代7~8期、9世紀後半の平安時代前期と思われる。用途については不明である。

#### 6 集石遺構

中央地区で3ヶ所検出した。いずれも黄褐色砂質土の地山を掘り込み、径5~20cmの礫がみられる。床面は平坦で硬いが内部施設はみられない。壁はほとんど残存しない。遺物はいずれからも出土していない。これらの時期は、切り合い関係などから判断して古代8期以降、すなわち9世紀後半以降であるとしかわからない。用途も不明である。

#### 7 溝址・流路址(第11、13図、第3表)

##### 第1201、1202号溝址(第13図)

両者とも中央地区南東部で検出した。ほぼ平行に掘り込まれ、間に1211土がある。幅はいずれも概ね45cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。覆土は灰褐色砂質土の単層である。用途については特定できないが、流水痕がみられないことから、区画溝等であった可能性はある。遺物はみられない。両者の時期は、遺物から判断できないため不明であるが、中世の遺構である可能性がある。

##### 第1203号溝址(第11図)

中央地区中央部で検出した。幅は概ね40cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。土師器杯Aが1点出土しているが混入の可能性はある。覆土は灰褐色砂質土で単層である。用途については特定できないが、流水痕がみられないことから区画溝等であった可能性はある。遺物はみられない。本址の時期は判然としませんが、1201、1202溝と直交方向にあたることからそれらと同様、中世の遺構である可能性がある。

##### 第1204号溝址

中央地区北部で検出したが、流水痕があることから、流路1とし、欠番とした。

##### 第1205号溝址(第11図)

中央地区中央部で検出した。幅は概ね40cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。覆土は黄褐色砂質土で単層である。用途については特定できないが、流水痕がみられないことから区画溝等であった可能性はある。遺物はみられない。本址の時期は遺物から判断できないため不明であるが、1201、1202溝と直交方向にあたることからそれらと同様、中世の遺構である可能性がある。

##### 第1206号溝址(第11図)

中央東地区北部で検出した。流路1から分岐する形で確認された。幅は概ね40cm程度で一定し、また両岸とも硬いことから人工溝と考えた。覆土は黄褐色砂質土である。遺物はみられない。本址の用途及び時期は不明である。

##### 流路(第11図)

大きくは4条確認した。1面での流路1は、1203、1204溝と同間隔で平行に存在するため、元来はそれらと同様人工溝であった可能性もある。4面の流路2は、同じ4面の流路4からのオーバーフローであると考えられ、幾つかも分流したものが確認されている。流路3は、ある時期に薄川が大きく氾濫した流れの1つであると考えられる。流路4も同じく薄川からの、一時的な流れの跡と考える。その他にも、図化していないが、1面において南東から北西にかけて、流路と考えられる礫面が広がっている。

第1表 住居址一覧表

(): 推定、◇: 残存

住居 凡例	図	平面形状	規模		主軸方向	方丈		地質	時期	備考
			長軸×短軸×深さ (cm)	床面積 (㎡)		位置	種類			
99	6	隅丸方形か	272×(112)×22	<1.56>	N-7°-E	不明	不明	不明	9C中 平安前	100住に切られる 南側覆瓦
100	6	不明	(364)×(196)×32	<5.44>	不明	不明	不明	不明	9C後 平安前	99住を切る 北側調査区外 南及東側覆瓦 住居址ではない可能性有
101	6	隅丸方形	306×280×16	6.64	N-1°-E	なし	—	3	弥生中	住居址ではない可能性有
102	6	方形か	432×(402)×37	<15.14>	N-85°-W	不明	不明	不明	9C後 平安前	西側調査区外
103	6	不明	302×(108)×6	<2.47>	N-5°-W	不明	不明	不明	9C中 平安前	北側覆瓦 床面一部残存
104	7	長方形	(348)×285×12	7.30	N-107°-E	東壁中央 石積 粘土	不明	不明	9C中 平安前	113住を切る 123住に切られる 東側覆瓦
105	6	方形か	400×360×16	8.83	N-89°-W	西壁中央 粘土	不明	不明	9C中 平安前	133住を切る 106住に切られる 北側覆瓦
106	7	方形か	(164)×(105)×5	<0.82>	N 73° W	不明	不明	1	9C後～ 平安	105住を切る 西側調査区外
107	7	長方形	272×232×11	5.08	N-5°-W	なし	—	—	11C後 平安後	—
108	—	—	—	—	—	—	—	—	—	穴番
109	8	長方形	436×318×24	10.23	N-67°-W	北西隅 石積 粘土	不明	不明	9C後 平安前	111, 116住を切る 1210土、P3, 4に切られる
110	9	方形	376×344×16	9.82	N 100° E	東壁中央 石積 粘土	不明	2	9C中 平安前	114住を切る
111	8	方形	394×372×18	11.45	N-67°-W	西壁中央 不明	不明	3	9C中 平安前	109, 116住、築石1, P5に切られる床面は残存
112	—	—	—	—	—	—	—	—	—	穴番
113	7	長方形か	256×(156)×15	<5.78>	N 104° E	東壁中央 不明	不明	不明	9C中 平安前	133住を切る 104住に切られる 中央部覆瓦
114	9	方形	396×348×13	10.61	N-102°-E	東壁中央 石積 粘土	不明	1	9C中 平安前	110住に切られる 床面は残存
115	—	—	—	—	—	不明	不明	—	11C後 平安後	穴番 遺構である可能性は高い
116	8	長方形か	488×(180)×10	4.66	N-111°-E	東壁か	不明	不明	9C後 平安前	111, 117住を切る 109住, 1210土、築石1, P3, 4に切られる
117	8	方形	470×456×21	15.21	N-111°-E	東壁中央 石積 粘土	不明	不明	9C中 平安前	118住を切る 116住, 1209, 1210, 1218土に切られる
118	7	方形	416×388×20	(12.03)	N 111° E	東壁中央 粘土か	不明	不明	9C中 平安前	117, 119, 1209住, 1203溝, P4に切られる
119	8	方形	378×348×8	(11.84)	N-13°-E	なし	—	—	11C後 平安後	118, 126住を切る 1207, 1208土, P6に切られる
120	7	長方形	254×212×5	4.33	N-5°-E	なし	—	4	不明	118住を切る P15, 16, 17, 18, 1202溝に切られる
121	10	方形	492×398×8	13.12	N-104°-E	北東隅 粘土	不明	5	12C前 平安後	築石2, 1201, 1205溝に切られる
122	9	方形か	388×(280)×24	(6.31)	N-27°-E	東壁中央 石積 粘土	不明	不明	9C中 平安前	123住, 1204土に切られる 西側覆瓦
123	10	方形	426×422×23	(14.84)	N 71° W	西壁中央 石積 粘土	不明	1	9C中 平安前	104, 122住を切る 127住, 1222土に切られる 中央部覆瓦
124	11	方形か	(344)×(132)×14	<2.3>	N-16°-E	不明	不明	不明	9C後 平安前	125住を切る 南及び北側覆瓦
125	11	不明	(192)×(80)×13	<0.42>	不明	不明	不明	不明	9C後 平安前	124住に切られる 南及び西側覆瓦
126	10	長方形	354×288×10	9.37	N-15°-E	なし	—	—	9C後 平安前	111, 116, 119住, 1203溝、築石1, P13に切られる
127	9	隅丸方形か	416×212×6	(5.86)	N 20° E	不明	不明	不明	9C後 平安前	123住を切る 107住に切られる 東半部覆瓦
128	10	長方形	374×292×14	8.04	N-23°-E	なし	—	—	9C後 平安前	129住を切る
129	10	方形か	468×384×4	(15.22)	N-115°-E	東壁中央 石積 粘土	不明	3	9C中 平安前	128住に切られる
130	10	方形	366×354×11	10.86	N-18°-E	なし	—	—	不明	135住を切る 1228, 1230土, 1206溝、水路1に切られる
131	11	長方形	390×324×36	(10.76)	N 17° E	不明	不明	4	不明	136住を切る 1201溝、水路1に切られる 東側一部覆瓦
132	10	方形か	(276)×(80)×11	<1.48>	N-15°-E	不明	不明	1	不明	南側調査区外
133	10	方形か	328×(88)×16	<1.43>	N-3°-E	不明	不明	不明	不明	105, 113住に切られる 北側覆瓦
134	11	隅丸方形か	356×(364)×8	(6.39)	N-30°-E	不明	不明	3	不明	136住を切る 東半部覆瓦
135	10	隅丸方形か	266×(150)×22	<2.29>	N 18° E	不明	不明	不明	11C後 平安後	130住, 1228土、瓦路1に切られる 西半部覆瓦
136	11	不明	(342)×(100)×16	<1.34>	N-72°-W	西壁中央 石積 粘土	不明	不明	不明	134, 134住, 1201溝に切られる 東側覆瓦
137	11	不明	(116)×(92)×8	<0.82>	不明	不明	不明	不明	不明	南東隅のみ残存

第2表 竪穴状遺構一覧表

(): 推定、◇: 残存

図	地区	図	平面形状	規模		主軸方向	内装施設	時期	備考
				長軸×短軸×深さ (cm)	床面積 (㎡)				
1201	中央東	11	長方形	(272)×178×38	<3.53>	N-72°-E	貼り残有	中世か	131, 136住を切る 東側覆瓦
1202	北	11	不明	(192)×(92)×30	<1.26>	N-15°-E	なし	9C後 平安前か	1236土、瓦路3に切られる

第3表 溝址・流路址一覧表

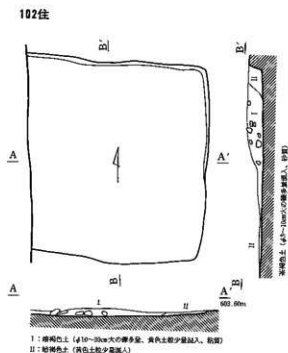
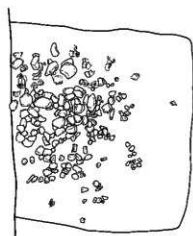
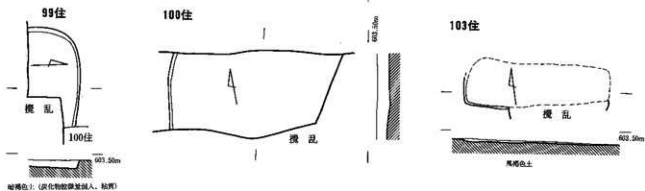
○：残存

No.	出土部 位置	区画	起点 座標	終点 座標	溝の 形状	規模(m)			土質	備考
						長さ	幅	深さ		
1201	1 中央	11	S06E10 (北端)	S09E08 (南端)	直形	420	44 ~48	~21	中世か	1202溝、1211土とセットか
1202	1 中央	11	S06E10 (北端)	S03E06 (南端)	直形	<744>	40 ~48	~11	中世か	1201溝、1211土とセットか
1203	1 中央	—	N50E07 (東端)	N01E03 (西端)	直形	408	40 ~45	~6	中世か	—
1204	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
1205	2 中央	—	S06E05 (東端)	S05E02 (西端)	直形	415	40 ~48	~5	中世か	121住を切る 流路1に切られる
1206	2 中央	—	N00E16 (東端)	N03E13 (西端)	直形	315	40 ~48	~7	不明	130住を切る
流路1	1 中央東 ~中央	—	N01E20 (東端)	N06E09 (西端)	直形	<1415>	40 ~110	~7 ~18	中世か	130、131、135住、1201墓、1228土を切る 1221土に切られる 雨々分断している
流路2	4	—	N03E25 (東端)	N07E11 (西端)	直形	<2050>	50 ~255	~5 ~15	不明	流路4からのオーバーフローか
流路3	4	—	N09E27 (東端)	N14E11 (西端)	不明	<1730>	350~	80~	不明	一時的な溝川の大きな流れの跡か
流路4	4	—	N03E21 (東端)	N03E11 (西端)	不明	<1140>	400~	65~	不明	一時的な溝川の大きな流れの跡か

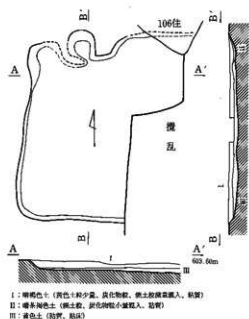
第4表 土坑一覧表

()：推定、○：残存

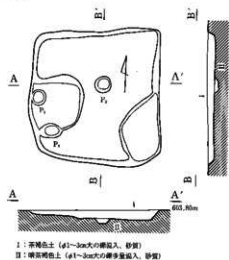
No.	形式	区画	形状	規模	埋藏・埋没の 深さ(m)	時期	備考
1201	西	1	12	円形	100×86×10		
1202	西	1	12	円形	70×68×15		
1203	中央	1	13	方形	204×188×18	中世か	
1204	中央	1	13	長方形	240×180×23	中世か	122住を切る 礎石層に出土 出土図有
1205	中央	1	13	長方形	178×114×10	中世か	P77、28を切る
1206	中央	1	12	長円形	90×64×14		
1207	中央	1	12	楕円形	60×46×10	中世か	119住を切る
1208	中央	1	12	長円形	92×50×16	中世か	119住を切る
1209	中央	1	12	不整形円形	118×106×12		116、117住を切る
1210	中央	1	12	不整形円形	168×110×22	中世か	109、116、117住を切る
1211	中央	1	13	長円形	152×62×11	中世か	201、1202溝とセットか
1212	中央	1	12	長円形	78×54×10		
1213	西	1	12	不整形長円形	68×44×9		P77に切られる
1214	西	1	12	円形	92×88×14		
1215	西	1	12	円形	60×54×10		
1216	西	1	12	円形	85×90×16		
1217	—	—	—	—	—	—	欠番
1218	中央	1	12	円形	80×76×20		117住を切る
1219	西	1	12	長円形	130×73×16		
1220	西	1	12	円形	52×50×16		
1221	中央	1	13	不整形方形	160×136×20	中世か	流路1を切る
1222	西	2	12	円形	56×52×10	中世か	127住を切る 白磁小皿出土
1223	中央東	2	13	楕円形	200×140×35	中世か	「真」新倉緑釉陶器片、鉄釘出土 西側埋没
1224	中央東	2	12	長方形	216×140×21		
1225	中央東	2	13	方形	178×148×7	中世	新倉元瓦、元井通貫土 瓦割増瓦
1226	中央東	2	12	楕円形	158×112×8	中世(13C)	1227、1228土を切る 東路系黒陶磁器類、鉄釘出土 ブシ穴か
1227	中央東	2	12	楕円形	920×800×36	中世か	1226土に切られる 北側埋没
1228	中央東	2	13	長方形	216×140×16	中世か	130住、1230土を切る 流路1に切られる
1229	中央東	2	13	円形	(152)×128×64	中世か	1228土に切られる
1230	中央東	2	13	長方形	180×128×32	中世か	130住を切る 1228土、流路1に切られる
1231	中央東	2	12	円形	84×82×12	中世か	
1232	—	—	—	—	—	—	欠番
1233	東	2	12	円形	48×45×22		
1234	中央東	2	12	円形	106×88×40	中世	新倉元瓦出土 西側埋没
1235	東	2	12	不整形円形	136×102×38		礎石層に出土 東側調査区外
1236	北	4	12	不整形円形	88×68×34	平安朝(9C)か	
1237	中央東	2	12	不整形方形	88×72×28		135住に切られる 西側埋没
1238	—	—	—	—	—	—	欠番
1239	中央	3	12	楕円形	160×80×8	中世か	
1240	中央	3	12	不整形	(152)×80×32		
1241	中央東	3	12	楕円形	124×92×40	中世か	一部分ビット状になっている
1242	中央東	3	13	不整形長方形	240×124×56	中世	新倉元瓦出土
1243	中央東	3	13	長方形	196×156×10	中世か	1246土を切る 礎石範囲有
1244	中央東	3	13	不整形長方形	204×148×28	中世か	1245、1246土を切る
1245	中央東	3	13	長方形	204×146×20	中世か	1244土に切られる 西側埋没
1246	中央東	3	13	不明	(154)×136×21	中世か	1243、1244土に切られる
1247	中央東	4	12	楕円形	78×50×20	平安朝(9C)か	
1248	中央東	4	13	円形	112×92×8	平安朝(9C)か	1249土に切られる
1249	中央東	4	13	円形	124×110×24	平安朝(9C)か	1248土、3層-P3(P67)を切る
1250	中央東	4	13	円形	84×80×18	平安朝(9C)か	1251土、3層-P3(P67)を切る 一部分ビット状になっている
1251	中央東	4	13	円形	72×68×20	平安朝(9C)か	1250土に切られる
1252	中央東	4	13	円形	60×50×18	平安朝(9C)か	



105住

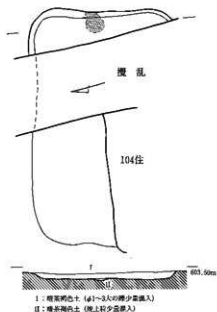


101住

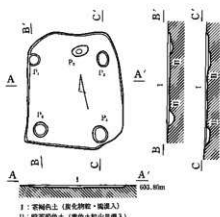


第6図 第99~103・105号住居址

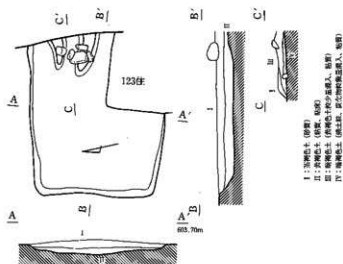
113住



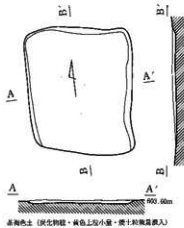
120住



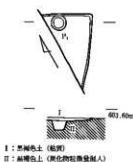
104住



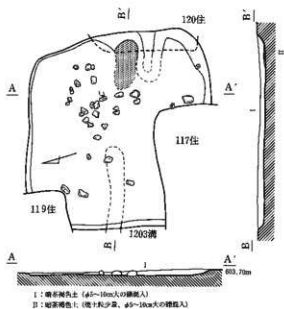
107住



106住

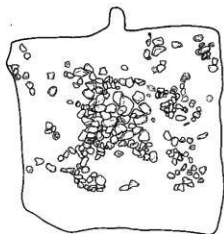


118住

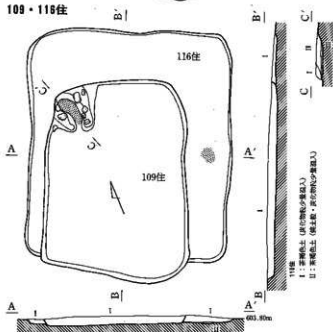


第7図 第104・106・107・113・118・120号住居址



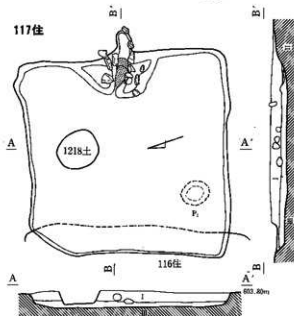


109・116住



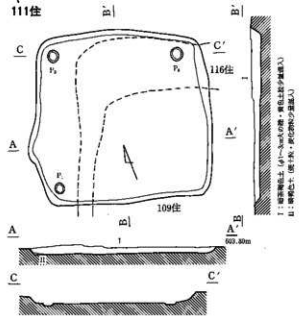
116住  
I: 赤褐色土 (厚約10cm、少量灰質)  
II: 赤褐色土 (粘土質、灰質割合少量混入)  
III: 赤褐色土 (粘土質、灰質割合少量混入)

117住



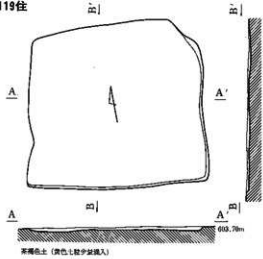
I: 赤褐色土 (黄色土少量混入)  
II: 赤褐色土 (粘土質)  
III: 褐色土 (粘土質)

111住



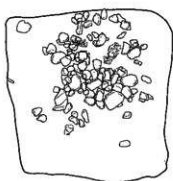
I: 赤褐色土 (粘土質、少量灰質)  
II: 赤褐色土 (粘土質、少量灰質)

119住

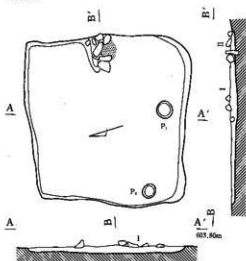


赤褐色土 (黄色土少量混入)

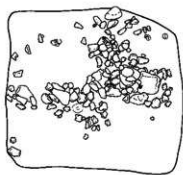
第8図 第109・111・116・117・119号住居址



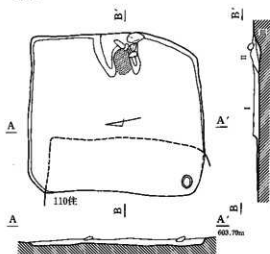
110住



I: 褐色褐色土 (砂質)  
II: 褐色褐色土 (黄土状少量混入)

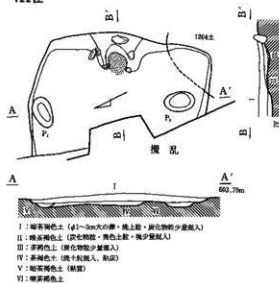


114住



I: 暗茶褐色土 (黄土状少量混入)  
II: 暗茶褐色土 (粘質)  
III: 茶褐色土 (黄土状少量混入)

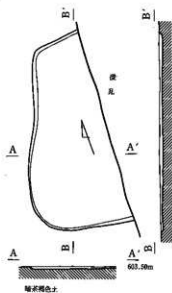
122住



I: 暗茶褐色土 (4)~5m大の塊・塊上層・腐化物状少量混入)  
II: 暗茶褐色土 (灰色物質・黄色土粒・極少量混入)  
III: 茶褐色土 (腐化物状少量混入)  
IV: 茶褐色土 (塊状混入、粘質)  
V: 暗茶褐色土 (粘質)  
VI: 暗茶褐色土

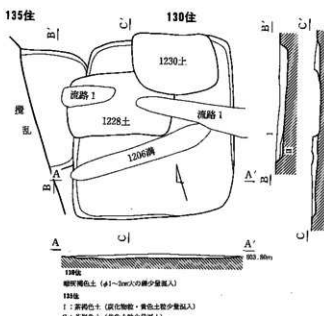
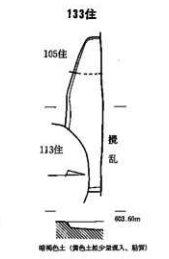
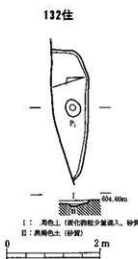
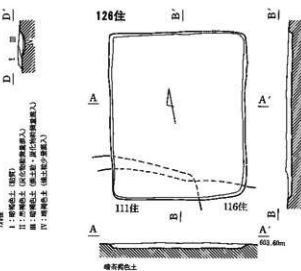
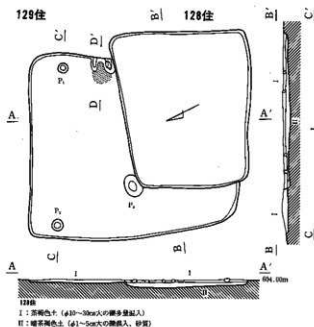
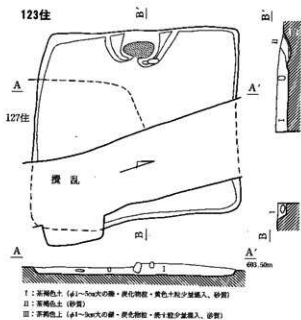
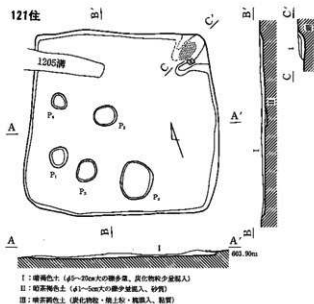
0 2m

127住

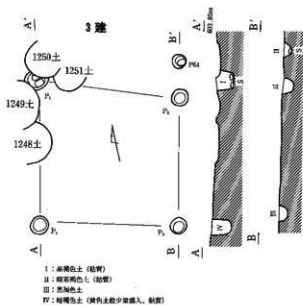
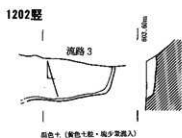
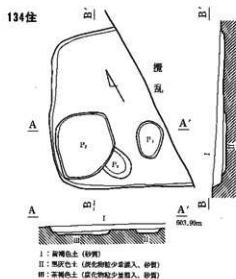
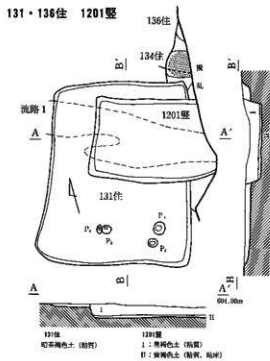
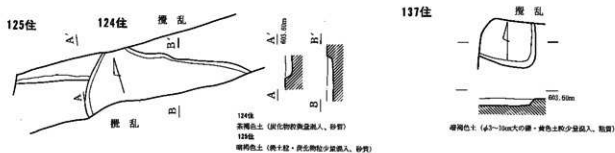


暗茶褐色土

第9図 第110・114・122・127号住居址



第10図 第121・123・126・128・129・130・132・133・135号住居址



溝・流路

1203溝



1205溝



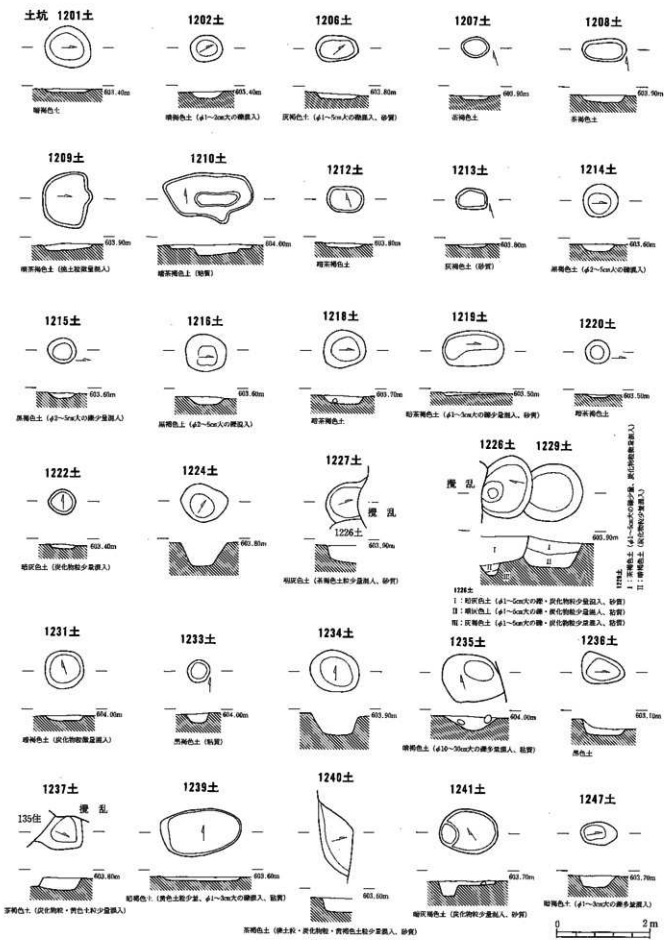
1206溝



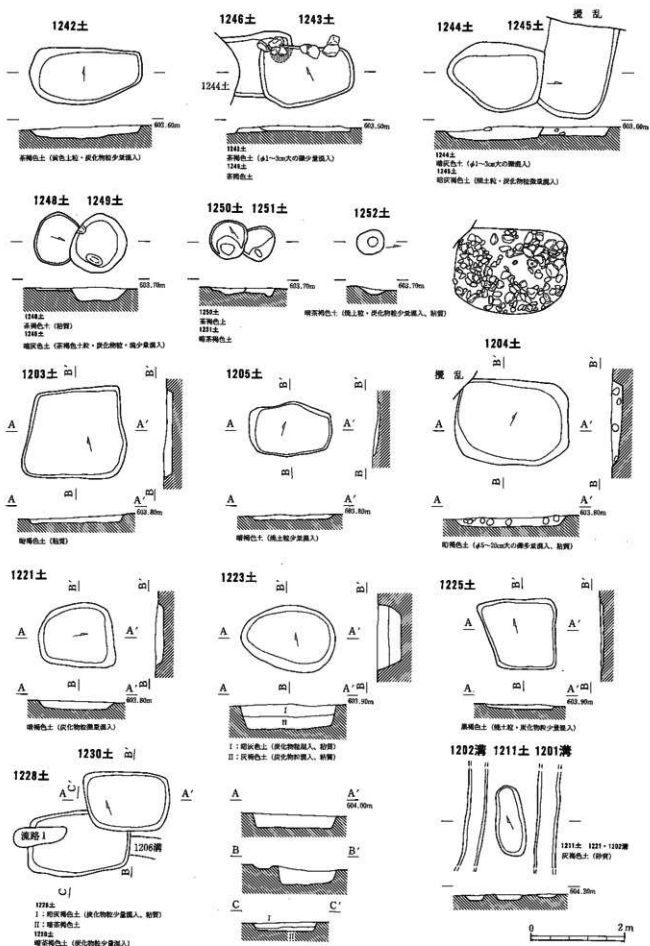
流路1



第11图 第124・125・131・134・136・137号住居址、第3号掘立柱建物址、壁穴状道槽、溝址、流路址



第12図 土坑(1)



第13図 土坑(2)・溝址

## 第3節 遺物

### 1 土器・陶磁器 (第14～21図、第5表)

今回の調査によって出土した遺物は、整理用テンバコ22箱を数え、弥生時代・平安～中世の多量の良好な資料を得ることができた。それらのうち図化し得たものは、土器、陶磁器は377点である。ここではそれらの様相について述べていく。

#### A 弥生時代の土器

今回の調査では、弥生時代の明確な遺構を捉えることはできなかった。しかし、第1章で述べたように洪水の常襲地でありながらも、この地に弥生時代の遺構が存在した証明として、若干ではあるが遺物が出土している。

図化し得たものは101住の2点(12、13)で、12は外面に波状文、13は外面に簾状文及び波状文が施文され、口縁には縄文が施される(13は磨耗)。いずれも甕或いは台付甕とみられ、弥生時代中期末に属すると考えられる。

そのほかにも、図示し得ないが、調査区全域から、該期の土器片が出土している。

#### B 平安時代の土器

##### 種別・器形

種別には土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器、灰物陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器(白磁・青磁)、国内産陶器などがある。出土した土器・陶磁器類の大半を占めている。竪穴住居址覆土中からの出土が多い。以下では項末記載の参考文献(註1)に従って種別に器形を述べていく。

##### 土師器

123点図化した。器形には杯A、椀、盤B、甕類(甕B、小型甕D、羽釜D、甕D)などがみられる。

##### 杯A

ロクロ成形、底部回転糸切り、無高台の土師器で、8期以降に出現する。39点図化した。杯AⅡと杯AⅢの2つの法量があり、杯AⅡは黒色土器A杯Aの法量を受け継ぐもので、8期に出現する。今回の調査では、116住で4点(145、146、147、148)、107住で6点(74、75、87、88、89、90)、121住で9点(202、203、204、205、207、209、210、211、213)と多くみられ、119、127住でも確認できる。116住では口径平均13.13cm、器高平均4.05cmである。13期では口径9.94cm、器高2.7cmである。15期では口径8.9cm、器高1.96cmである。時間の経過とともに口径、器高を減じていく傾向があるといえる。

杯AⅢは、AⅡが小型化していく過程で、12期に出現する器形である。該期以降の、107住で3点(73、91、92)、121住で1点(208)みられる。これらの平均は、口径で13.79cm、器高で4.09cmである。

##### Ⅲ

手捏ねの、いわゆる中世のかわらけに類するものを1点(329)図化しているが、グリッド調査によるもので、遺構に伴うか不明であるため、意義について述べることはできない。ただ今回調査において、その他に東海系無釉陶器山茶碗、施釉陶器御皿などの中世遺物が出土しているため、中世遺構の存在を想起させる資料とはなりうるものである。

##### 椀

ロクロ成形、底部回転糸切り、付高台の土師器である。9～15期の土器群にみられる。今回の調査では、概期の遺構が少ないためか全体として出土量も少なく、9点を図化したのみである。また、小破片が多く、総体としての規模を明らかにできるものが少ないため、ここで法量等について述べることは困難である。

##### 盤BⅡ

ロクロ成形、底部回転糸切り、付高台の土師器である。身部が浅く足高の高台をもつ、口径10cm前後のものである。11期以降に出現する。1244土出土の1点(294)を図化したのみである。

甕類には甕B、小型甕B、小型甕D、羽釜A、甕D、円筒型土器がある。

##### 甕B

甕Bは、粘土紐積上げで成形し、体部外面をハケメで調整した長胴甕で、1期から10期にかけてみられる煮炊具の代表的なものである。8期以降は急速に減少していき、10期ではほとんどみられなくなる。今回の調査では37点出土している。7、8期の住居址ではカマド付近を中心に多くみられる。102住(14、37、38、39、40)、104住(50)、105住(53、54)、109住(103)、110住(116、117、118)、102住(14)で出土している。しかし全体の規模のわかるものは少ない。高さは31.2～32.2cm(4点)で平均31.65cm、底径は8.4cm～11.4cm(9点)で平均9.97cmである。

#### 小型甕

小型甕Bは、甕Bと同様で腰部をハケメ調整するものであるが、1期から5期までしかみられない。今回は122住(220)で確認されたが、住居地の時期からみて混入と考える。小型甕Dはロクロ成形で腰部にカキ目、ロクロ目がみられ、口径と器高の比が1:1になる甕である。370を除いて外面にカキ目が見られる。4期から15期までみられるものである。今回の調査では、7、8期のものを15点図化した、口径9.6~13.4cm、器高9.3~9.4cmである。

7期のもは105住(55)、117住(154、155、157)、118住(197)、122住(223、224、225、226)で出土している。224は全体のわかるもので口径10.8cm、器高9.3cmである。

8期のもは102住(15)で1点みられるが、底部のみで、全体は明らかでない。

今回の調査では、13~15期の住居地から、小型甕の出土はみられない。

#### 羽釜D

羽釜Dは指ナデ、ハケ目、板状工具によるナデなどが器面にみられる甕で、銜部が口縁部下にみられる。羽釜は11期に出現する。今回の調査では13期の107住(86)から1点出土しているのみである。

#### 甕

甕Dがみられる。甕Dは、羽釜の底部を抜いた形を呈するもので、11期に出現する。今回の調査では、14期の119住から2点(200、201)出土している。201は全体のわかるもので、底部に輪積み痕があり、口縁部はロクロナデ成形をされる。銜は巾1.2cmほどのものが貼り付けられている。

#### 円筒型土器

口径は12cm前後、胴部はそれより一回り太い円筒状の土器で、腰部外面には縦方向のハケメが施される。底部は内側に折り返すようにしている。全体として規模のわかる資料は少ない。5~8期において、主としてカマド周辺で出土がみられることから、煮炊きに関連して使用されたものとみられている。

今回の調査では9点出土している。7期の住居地からは1点ずつ、117住(161)、122住(222)でみられた。8期の住居地では102住(16、17、18、19)、116住(142、143、144)と複数出土している。出土位置について、116住のものはいずれもカマドとみられる周辺であるが、その他については一定しない。分量について、全体の規模のわかるものは皆無である。7期のもは、161が底径9.8cm、222が口径11.4cmである。8期のもは、口径が11.2~14.0cmで平均が12.55cm、底径がわかるものは144で10.8cmである。器高のわかるものは存在しない。

#### 黒色土器

内面および内外面に黒色処理をするロクロ成形の土器である。器形には杯A、椀、鉢、皿がある。また今回の調査では小型甕、ミニチュアがみられる。内面のみ黒色処理を行う黒色土器A、内外面とも黒色処理を行う黒色土器Bがある。底部は回転糸切り痕、ナデ痕を持つ。黒色処理前にミガキが施される。黒色土器Aは123点、黒色土器Bは4点図化した。

#### 杯A

無高台の黒色土器で、分量によりI、IIがある。4~8期においてみられる。今回の調査では黒色土器Aのみである。51点図化した、うち43点が住居地内からのもので、7~8期の住居地において多くみられる。A Iは、7期の105住(58)、110住(114)、114住(131、133、134)、117住(164、167、168、172)、122住(233)と数量的にはあまり多くないが、特に114住、117住ではA I、A IIの両者ともにみられる。分量は口径15.5~19.4cmで平均16.8cm、器高5~7.2cmで平均5.56cmである。8期の住居地ではみられない。

A IIは、7期の住居地では99住(1、2)104住(56、57)、110住(105)、113住(126)、114住(129、130、132)、117住(165、166、169、170、171、180)、122住(234、235、236、237)とみられ、口径は11.6~13.95cmで平均12.99cm、器高は3.3~4.7cmで平均3.99cmである。8期の住居地では非常に少なく、100住(9)、102住(20、22、23)と4点出土しているのみで、分量も一定しない。

#### 椀

付高台の黒色土器である。7~15期においてみられる。黒色土器A、黒色土器Bがある。口径12.8~17.6cm、器高4.7~7.7cm、口径10cm前後の小椀もみられる。42点図化した(A:41点、B:1点)。

黒色土器Aは7期の99住(3、4)、105住(62)、110住(106、110、115)、117住(178、179、181、190、191)118住(193)、122住(230、231、238、239)、123住(251)で出土している。8期では100住(10、11)、102住(25、26、27、28、29)、109住で出土している。13期では107住(79、80、81、82、83、84、95、96)で出土がみられる。しかし、いずれも全体形がわかるものは少なく、分量については口径についてのみ述べておく。7期では12.8~17.6cmで



平均16.75cm、8期では14.0~16.8cmで平均15.36cmである。13期では、13.4cm、14.0cmのもの他、8.8cm、9.8cm、10.8cmという小碗がみられる。

黒色土器Bはグリッド調査で碗が1点(308)がみられるのみで詳細については不明である。

#### 鉢A

杯Aと相似であるが、口径20cmを超えるものを鉢Aとした。5~9期に存在する。今回の調査では7期の110住(113)、117住(156)、122住(228)と、遺構内からは3点のみである。また口径についても228と、トレンチ出土の341のみ(それぞれ口径22.4cm、34.0cm)と、全体形のわかるものは少ない。他は推定値が20cmを超えるものであるため、法量について詳しく述べることはできない。

#### 皿B

直線的に伸びる体部に高台をつけるもので、内面又は両面を丁寧にヘラ磨きし、黒色処理するもので、7~8期にみられる。黒色土器A、Bともにみられる。

黒色土器Aは、7期の114住(135、136)、117住(173、174、175、177、182)、122住(229、232、240)、8期の128住(263)でみられ、特に117住ではまとまって出土している。法量は口径が12.2~14.4cmで平均が13.31cm、器高が2.3~3.15cmで平均が2.88cmである。

黒色土器Bは2点みられ、7期の117住(176)、123住(249)である。いずれも全体形の判るもので、法量はそれぞれ口径が13.8cm、13.15cm、器高が2.6cm、1.65cmである。

#### 小型壺

99住(5)、1228土(291)の2点みられ、いずれも黒色土器Aである。5は外面クロナデされるため小型甕Dとした。291は内外面ともミガキ調整される。詳細については不明な点が多い。

#### ミニチュア

短頸壺型のミニチュア(361)が1点、検出面から出土している。調整は、外面はミガキされるが、内面はナデのみで、ミガキはされず黒色処理がされている。遺構からの出土ではないため、用途について述べることはできない。

### 須臾器

還元焙焼による硬質灰色土器で、ロクロ調整と窯による焼成によっている。器形には杯A、杯B、杯蓋B、壺類、甕類、また陶硯として風字硯がある。70点図化した。

#### 杯A

1~7期にみられる。今回の調査では36点みられ、そのうち23点が住居址覆土からで、102住(34)が8期のものである以外は全て7期の住居址からの出土である。104住(46、47)、110住(109)、111住(120、121)、113住(127)、117住(183、184、185、187)118住(194、195、196)、122住(241、242、243、244、245)、123住(252、253、254、255)でみられ、法量は口径が12.0~13.4cmで平均が12.79cm、器高が2.8~4.4cmで平均が3.47cmである。

#### 杯B

箱形の体部に高台を付けた形態で、杯蓋Bとセットをなす。法量によりIからVIに分類される。杯Aと同様、1~7期にみられる。今回の調査では8点図化した。底部高台部分の残存により杯Bと判断したものが全てである。底径からある程度の規模を考えられるものもあるが、全体のわかるものは皆無であり、法量による分類は難しい。

#### 杯蓋B

杯Bとセット関係にあるもので、杯Bと同様、法量によりIからVIに分類される。今回の調査では7点図化し、口径の明らかなものは105住(71)、111住(122)、トレンチ(345)の3点のみで、住居址のものはいずれも7期に属する。71はBIVで14.0cm、122はBIVで14.9cm、345はBIIかIIIで15.6cmとなる。

#### 壺類

長頸壺がある。今回の調査で壺類は7点出土している。明らかに長頸壺とみられるものは3点で、102住(35)、122住(247)、123住(256)である。いずれも球形胴に細い頸部が付く長頸壺Aである。他は明らかな器種を判断しがたい。このうち全体のわかるものは256で、器高は23.35cm、体部径19.1cmで、肩部に取手が1つ付くタイプである。

#### 甕類

今回の調査では4点図化した。いずれも規模を明らかにできるものはない。102住(36)のものは、肩部から胴部にかけて強く張り出した体部に外反する口縁部を付けた甕Aとみられるが、体部と口縁部の接合部のみで、全体の規模をうかがい知ることにはできない。114住(139)、グリッド(317)の2点は、甕Aの可能性があると明らかではない。

#### 風字硯

中世以降の石製碗と異なり、古代においては焼き物の碗、即ち陶碗が主体を占める。風字碗は陶碗の一種で、平面形が「風」という字の形に相似するため、その呼称を持つ。今回出土のものは、114住(128)の1点で、海部側が残存し、裏面には貼り付けの脚が1つ残存している。全体の規模は明らかではないが、内面には墨痕及び使用痕がみられる。外面の調整は、側面が工具ナデ、底面は一部未調整の他はヘラ削りされる。

#### 軟質須恵器

須恵器の一種であるが、須恵器に比して低温で焼成されるため、灰白色軟質を呈する。器形は杯Aのみで、7～8期のみ確認されるものである。8点図化した。住居址からの出土は、7期では110住(112)、129住(267、268)、8期では102住(32、41、42)、109住(101)、116住(149)である。この土器は、ほとんどが内外面に黒斑があるとされるが、今回のものはいずれもそれが顕著ではない。法量は、口径が12.8～13.85cmで平均13.24cm、器高が3.75～4.15cmで平均が3.91cmである。

#### 灰釉陶器

クロコ成形で器面に灰釉のかかる硬質の陶器である。7期に出現する。器形には碗、皿類(皿、段皿)、瓶類(小瓶、長頸壺)がある。今回の調査では31点図化した。大半は碗、皿類の食器具で、貯蔵具の瓶類は2点と少ない。初期の黒笹14号窯式のもの4点(102住33:皿、105住65:碗、グリッド326:皿、検出面367:碗)みられる。

##### 碗

クロコ成形、付高台、外面下半には回転ヘラ削りが施されるものもある。外面底部には回転ヘラ削り痕、ナデ痕、回転糸切り痕などがみられる。17点を図化した。

7期では105住(65、66、68)、111住(119)、118住(198)で出土している。全容のわかるものは119と198で、あるが、2点とも漬け掛け施釉のため混入とみられる。198は内外面に漆が付着している。8期では116住(151、152)で出土している。いずれも全体の明らかでないものはない。14期では135住(276、277)でみられるが、いずれも底部のみであり、全容は不明である。15期では121住(215)があるが、底部の小破片のため詳細についてはわからない。

##### 皿類

クロコ成形、付高台、外面下半には回転ヘラ削りが施されるものがある。外面底部には回転ヘラ削り痕、ナデ痕、回転糸切り痕などがみられる。皿と段皿がある。11点図化した。

7期では99住で皿が1点(8)、段皿が1点(7)、105住で皿が1点(67)出土している。いずれも全容がわかるものではない。口径は12.4～16.5cmである。8期では102住(33)と109住(99)で、いずれも皿で、口径が15.4～15.6cm、器高が2.3～3.1cmである。13期では107住(85、97)でいずれも段皿である。口径は12.2～12.8cm、器高が2.3～2.4cmで、7～8期のものに比して口径は小さい。

##### 瓶類

1221土の287は、長頸壺とみられるものの底部である。内面も施釉されている。高台は付高台である。1243土の293は、小瓶とみられるものの口縁部である。口唇部のみ施釉されている。いずれも全容は明らかでない。

#### 緑釉陶器

7点出土している。このうち小破片1点を除いた6点を図化した。器形には碗、皿、杯、三足盤がみられる。いずれも一部分で、器形という点で述べることもできるものは非常に少ない。しかし特殊なものはみられる。104住(45)は緑彩文陶碗、117住(153)は三足盤脚部、1223土(289)は刻書土器杯である。

##### 緑彩文陶(45)

104住出土である。底部のみ残存している碗である。内面はミガキ、底面はヘラ削りの後に両面施釉される。有段高台であることから近江屋とみられる。内面見込部に4弁の花の模様(緑彩花文)が施されることから、緑彩文陶と呼ばれるものの一種であるが、北栗遺跡SB127(註2)或いは第4次調査検出面(註3)などでみられるような、生地に花文を刻んだ後に緑釉を施す陰刻花文ではなく、釉薬の濃淡によって描かれているもので、類例として多賀城跡(宮城県)、上総国分尼寺(千葉県)、更埴来里遺跡・恒川遺跡・和手遺跡(長野県)、八事堂跡(愛知県)、高宮跡(三重県)等でみられる(註4)。

##### 三足盤(153)

117住貼床下出土である。名古屋市八事堂跡出土の二彩三足盤に類似するものの脚部とみられる破片である(註5)。軟質で、ヘラ削りの後に淡緑色の施釉がされ緻密な造りとなっている。体部はほとんど残存せず脚部のみであ

る。脚部の断面形は八角形を呈する。先端部は外側に刻みが入り、その部分にも八角形の稜線が続いている。出土位置が住居址貼り床の下であるためその意義について述べることはできないが、類例は少なく希少なものであろう。

#### 刻書土器 (289)

1223出土の杯である。底部のみ残存する。高台は円盤状削り高台で、内面はミガキ、底面は回転ヘラ削りの後に淡緑色の施釉がされる。また底面には「真」とみられる文字が、施釉後に刻まれている。京都産とみられる。

### (2) 出土土器群

今回の調査では古代7、8期の他、13～15期までの土器群がみられる。以下、各期土器群の組成と特徴をみていく。7期の土器群

99住、103住、104住、105住、109住、110住、111住、117住、118住、122住、123住、129住がある。今回の調査で最も多くみられる土器群である。器種は土師器、須恵器、軟質須恵器、黒色土器A、灰軸陶器で構成される。

食器：土師器椀・鉢・高杯、須恵器杯A・杯B・杯蓋、軟質須恵器杯A、黒色土器杯A・椀・鉢A・皿、灰軸陶器皿・段皿・椀、緑釉陶器皿がみられる。

煮炊具：土師器甕B・小型甕B・小型甕D・円筒型土器がみられる。

貯蔵具：須恵器長頸壺A・甕D、陶器壺がみられる。

特殊品：須恵器風字硯、緑釉陶器緑彩文陶・三足盤がみられる。

土師器杯或いは椀、高杯、甲斐型杯が104、105、129住でみられるが、混入品の可能性がある。食器の主体は須恵器杯A (22点)、黒色土器杯A (34点)、椀 (18点) と多くを占めるが、今回は黒色土器皿も10点と比較的多い。黒色土器杯Aは大小二法量 (I、II) あり、口径15cm、器高5cmを超える大型のIが10点 (平均口径16.76cm、器高5.59cm)、小型のIIが21点 (平均口径12.97cm、器高4.19cm) みられ、比率はほぼ1:2である。灰軸陶器もみられるが、小破片が多いため判断としない。105住出土の65は黒笹14号窯式の椀である。煮炊具では甕B (21点)、小型甕D (10点) が主体を占める。ハケ目の施される小型甕Bは混入であろう。甕Bは全体のわかるものは少ない。器高は31cm台、底径は9cm台だが、底径11cmのもの (116、266) もある。小型甕Dは全て外面にカキ目がみられる。円筒型土器が117住、122住から出土しているが、口縁部のみと底部のみであり、全体形については不明である。出土位置もカマド周辺というわけではなく、また煤などの付着もないことから煮炊具と判断できず、用途は不明といわざるを得ない。貯蔵具は長頸壺Aがあり、123住の256は全体がわかるものである。特殊品については前述しているため省略する。

#### 8期の土器群

100住、102住、116住、125住、126住、127住、128住がある。7期に次いで多くみられるが、102住がその主体を占める。器種は土師器、黒色土器A、灰軸陶器、緑釉陶器で構成される。

食器：土師器杯A・椀、黒色土器A杯A・椀・皿、須恵器杯A、灰軸陶器椀、皿がみられる。

煮炊具：土師器甕B・小型甕D・円筒型土器がみられる。

貯蔵具：須恵器長頸壺A・甕A、壺類がみられる。

食器類では土師器杯Aが出現する。7点みられ口径平均12.64cm、器高平均3.83cmである。他には黒色土器A杯A、椀が多くみられる。灰軸陶器は3点と数量的には少ない。煮炊具では土師器甕B・小型甕Dがみられる。甕Bは底径が9.4～11.4cmで、7期のものより底径は大きくなるが、全体のわかるものは102住の40のみである。小型甕Dは15にカキ目がみられる。7期に引き続き円筒型土器が102住、116住から出土している。貯蔵具は102住に須恵器長頸壺A (35)、116住で壺類 (150) がみられる。

#### 13期の土器群

67住が該当する。器種は土師器、黒色土器、灰軸陶器、白磁で構成される。貯蔵具はみられない。

食器：土師器杯A、椀、土師器盤B、黒色土器A椀、灰軸陶器段皿、白磁がある。

煮炊具：羽釜Aがある。

土師器杯AにはAIIとAIIIの2法量みられる。AIIは5点で口径平均9.94cm、器高平均2.7cmである。土師器杯AIIIは3点出土しており、口径13.1～13.8cm、器高4.0～4.35cmである。椀は1点のみである。黒色土器A椀は8点みられるが、全体のわかるものは96のみである。白磁皿 (98) は口縁のみの小破片である。灰軸陶器皿類は全て段皿である。煮炊具は羽釜Aが1点 (86) みられる。

#### 14期の土器群

119住、135住がある。器種は土師器、灰軸陶器で構成される。貯蔵具はみられない。

食器：土師器杯AII、灰軸陶器椀がある。

煮炊具：甗Dがある。

土師器杯AはAⅡ2点のみでAⅢはみられない。口径は8.2cm、9.55cm、器高は1.8cm、1.5cmである。灰軸陶器碗は2点みられるが、いずれも底部のみで朱墨痕があることから、転用碗として用いられたと考える。煮炊具は甗Dが2点みられ、119住の1点(201)は全体のわかるもので、底部に輪痕み痕があり、口縁部はロクロナデ成形をされる。甗は巾1.2cmほどのものが全周に貼り付けられていたとみられる。

#### 15期の土器群

121住が該当する。器種は土師器、灰軸陶器で構成される。貯蔵具はみられない。1点土師器蓋が出土しているが、古墳時代中期に属するもので、混入とみられる。

食器：土師器杯AⅡ、杯AⅢ、碗、灰軸陶器碗がある。

煮炊具：土師器甗

土師器杯AにはAⅡとAⅢの2つの法量があるが、杯AⅢは1点(208)しかみられない。土師器杯AⅡは口径平均8.88cm、器高平均1.96cmである。灰軸陶器碗(215)には高台に鈍い稜がある。煮炊具は甗とみられる器形のもの1点(214)出土しているが、底径が16cmと大きいことから、鍋といったほうがいいかもしれない。

### (3) 文字関係資料

6点出土している。いずれも平安時代の土器である。墨書は117住の須恵器杯蓋1点(192)のみであるが、文字部分の大部分が欠失しているため、文字は不明である。刻書は1223土の緑軸陶器杯(289)で、底部に「真」と刻まれている。へら記号とみられるものは検出面の須恵器杯B1点(366)のみである。器面に墨痕のあるものは2点出土した。いずれも135住出土の灰軸陶器碗(276、277)で、朱墨が付着している。114住では須恵器風字硯(128)が出土しているが、これについては前述しているのでここでは省略する。

## C 中世以降の土器・陶磁器

器種には輸入陶磁器、土師器、陶器などがある。19点出土している。このうち10点図化した。

### 輸入陶磁器

青磁・白磁がみられ、青磁が6点、白磁が7点出土しているが、小破片が多く、図化できるものは少ない。器形としては碗、皿類が多く見受けられる。図化し得たものは白磁3点である。このうち遺構に伴うものは2点で、107住(98)、1222土(288)で出土している。98は玉縁口縁の皿とみられる小破片である。288は小壺で、外面は光沢のある強いミガキが施される。グリッド調査の328は皿とみられる口縁部の小破片である。これらの時期は、古代14～15期(11～12世紀代)から中世にかけてであるとみられる。

### 土器・陶器

遺構内からの出土は少ない。129住出土の灰軸丸碗(272)は瀬戸・美濃産の江戸時代17世紀後半に属するもので、後世の混入品である。1226土出土の陶器卸皿(290)は東海系糸輪陶器で中世Ⅱ期15世紀後半の室町時代に属するものと考えられる。今回の調査では表土直下の面を中世に属する第1面としたが、一部の土坑、溝以外の遺構を明確に捉えることができなかったため、グリッド調査により遺構・遺物の確認を行った。その過程で多くの遺物を回収し、そのうち図化し得た中世の土器・陶器は、土師器皿(329)、陶器壺或いは甗(330)の2点である。329は精緻に手捏ね成形されるいわゆるかわらけで、中世Ⅰ期13世紀の鎌倉時代に属するものと考えられる。330は常滑産で、壺か甗とみられるものの口縁部である。その他には東海系無軸陶器の捏ね鉢、山茶碗がみられる。

## まとめ

今回の調査では、平安時代前期を中心に多くの遺物の出土がみられたが、一部残存した弥生時代の遺物も出土している。中世の遺物もそれほど多くはないが出土がみられたため、中世遺構の存在を示唆する資料を得ることができたといえる。また緑彩文陶などの特殊遺物は、この遺跡の特殊性を示すものであるといえる。

- 註1 長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4」松本市内その1 総論編  
註2 長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8」松本市内その5 北東遺跡  
註3 松本市教育委員会 1990「松本市文化財調査報告No.82」松本市泉町遺跡 -緊急発掘調査報告書-  
註4 五島美穂 1998「天平に咲いた華 日本の三彩と緑軸」特別展天平に咲いた華 日本の三彩と緑軸、図録  
註5 中央公論社 1989「日本の陶磁 古代中世篇2」三彩 緑軸 灰軸

第5表 土器類表

種別	品名	形状	高さ	口径	底径	重量	出土層	出土位置	出土状況	備考
1	9929a1	高A	杯A II	(13.4)	(6.4)	(4.0)	□1/9 底1/4	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		99-1
2	9929b	高A	杯A II	(12.5)	5.5	(4.1)	□1/9 底7/8	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		99-2
3	9929c7	高A	杯A II	(12.8)			□1/9 底	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		99-3
4	9929d10	高A	杯		3.3		底	ロクロナダ、凹形糸切、付蓋台後ナダ、内面ミガキ後黒色処理		99-4
5	9929e8	高A	小型器D	10.6			□1/3	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		99-5
6	9929f6	高A	皿		(10.7)		底一節	ロクロナダ、凹形ヘラケズリ、付蓋台後ナダ	底部内面と外周一部に自然磨け跡	99-6
7	9929g7	高A	皿	(16.3)			□一節	ロクロナダ、ヘラケズリ、磨き跡付		99-7
8	9929h7	高A	皿	(15.2)			□1/16	ロクロナダ、ヘラケズリ、磨き跡付		99-8
9	10029a1	高A	杯A II	12.90	5.5	3.95	□底 底	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理	口縁部みみ	100-1
10	10029b2	高A	杯	15.1	6.2	5.25	□2/4 底	ロクロナダ、凹形糸切、付蓋台後ナダ、内面ミガキ後黒色処理	口縁部みみ	100-2
11	10029c3	高A	杯	(15.3)	6.7	(4.7)	□1/2	ロクロナダ、凹形糸切、付蓋台後ナダ、内面ミガキ後黒色処理	口縁部みみ	100-3
12	10129a1	高A	徳か台付罐	(14.4)			底一節次	内面ミガキ後黒色処理 ハタ状工具ナダ後脱状、内面ヘラケズリ後ミガキ、口縁部		101-1
13	10129b1	高A	徳か台付罐	(17.6)			□一節	エナガキ、磨き跡、表面ミ、内面ナダ、1線磨き跡		101-2
14	10129c1	高A	徳か		(11.2)		底1/2	ハケミ、ヘラケズリ、磨き跡ミ、内面ナダ、ハケミカキ、自然糸切、内面ロクロナダ		101-3
15	10229a5	高A	小型器D		7.4		底	外周ミガキ、ハケミ後ミガキ、内面ナダ		102-4
16	1029a	高A	□一節	(12.4)			□一節	口縁部ナダ、内面カキミ、内面ナダ		102-2
17	1029b11	高A	内面黒土製				□1/4	口縁部ナダ、ロクロナダ、内面ナダ		102-5
18	1029c10	高A	土	(13.4)			底1/4	ハケミ、ナダ、内面ナダ、底面ナダ		102-6
19	1029d13	高A	内面黒土製		(15.6)		底1/3	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-7
20	1029e5	高A	杯A II	14.4	6.4	5.95	□1/2 底	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-7
21	1029f10	高A	杯A II	(14.4)	6.6	5.9	□1/2 底	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-8
22	1029g19	高A	杯A II		6.0		底	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-9
23	1029h21	高A	杯A II	(13.8)	(6.0)	(2.6)	□1/9 底1/3	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-10
24	1029i7	高A	杯A	(6.5)			底1/4	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-11
25	1029j22	高A	杯		7.4		底	ロクロナダ、凹形糸切、付蓋台後ナダ		102-12
26	1029k7	高A	杯		6.1		底一節次	内面ミガキ後黒色処理 ロクロナダ、凹形糸切、付蓋台後ナダ、底面1/2		102-13
27	1029l7	高A	杯	(16.8)			□一節	ロクロナダ、凹形糸切、付蓋台後ナダ、内面ミガキ後黒色処理		102-14
28	1029m7	高A	徳か	(15.4)			□1/8	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		102-15
29	1029n7	高A	徳か	(14.6)			□1/4	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		102-16
30	1029o26	高A	徳か		3.8		底	ロクロナダ、凹形糸切		102-17
31	1029p14	高A	徳か		4.9		底	ロクロナダ、凹形糸切、付蓋台後ナダ		102-18
32	1029q11	高A	杯A	(13.6)	5.8	3.9	□1/2 底	ロクロナダ、凹形糸切		102-19
33	1029r2	高A	杯	(15.4)	(8.2)	(2.3)	□1/2 底1/2	ロクロナダ、凹形ヘラケズリ、付蓋台後ナダ、底ミ、磨き跡	底面ミ、磨き跡	102-20
34	1029t7	高A	杯A		5.2		底	ロクロナダ、凹形糸切		102-21
35	1029u15	高A	高脚器A		5.7		底	ロクロナダ、凹形ヘラケズリ、凹形糸切、付蓋台後ナダ		102-22
36	1029v10	高A	徳か				□1/3	ロクロナダ、ナダミ、内面ミガキ、ナダ		102-23
37	1029w11	高A	徳か	(21.4)			□底	口縁部ナダ、内面ハケミ、内面カキミ、ナダ		102-24
38	1029x14,7,9	高A	徳か	(20.8)			底	口縁部ナダ、内面ハケミ、内面カキミ、ナダ		102-25
39	1029y5,4,6,7	高A	徳か		9.4		底1/2	口縁部ナダ、内面ハケミ、ヘラケズリ、内面カキミ、ナダ		102-26
40	1029z10,13	高A	徳か	21.7	(11.4)	32.2	□底 底1/18	口縁部ナダ、内面ハケミ、ヘラケズリ、内面カキミ、ナダ		102-27
41	10329a	高A	杯A	(13.5)	5.4	4.9	□1/4 底	ロクロナダ、凹形糸切		103-1
42	10329b15	高A	杯A II	(12.4)	5.2	4.9	□1/9 底	ロクロナダ、凹形糸切		103-2
43	10329c10	高A	杯A	(17.2)			□1/10	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		103-3
44	10329d7	高A	杯A		(5.4)		□1/9	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		103-4
45	10429a1	高A	徳か		(5.4)		底一節次	ミガキ、凹形ヘラケズリ、付蓋台後ナダ	内面ミガキ後黒色処理 底面ミ、磨き跡	104-1
46	10429b7	高A	杯A	(12.4)	(4.8)	3.2	□1/8 底一節	ロクロナダ、凹形糸切		104-2
47	10429c7	高A	杯A	(13.3)	(7.9)		□1/5 底一節	ロクロナダ		104-3
48	10429d7	高A	杯A	(16.0)			底	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		104-4
49	10429e7	高A	杯A	(12.4)	(6.1)		底1/2	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		104-5
50	10429f7	高A	杯		7.3		底	ロクロナダ、凹形糸切		104-6
51	10429g7	高A	杯	(17.4)			□1/20底面1/2 底	ロクロナダ、凹形糸切		104-7
52	10429j7	高A	ミガキ		(12.2)		底	ミガキ、ナダ	底の一部	104-8
53	10529a1	高A	徳か	(24.4)			□1/8	口縁部ナダ、内面ハケミ、内面ナダ		105-1
54	10529b7	高A	徳か	(25.0)			□1/16	口縁部ナダ、内面ハケミ、内面カキミ、ナダ		105-2
55	10529c7	高A	小型器D	(13.2)			□一節	口縁部ナダ、内面カキミ、内面カキミ、ナダ		105-3
56	10529d2	高A	徳か	13.4	6.3	4.5	□1/2 底	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		105-4
57	10529e7	高A	杯A II		6.0		□1/9 底	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		105-5
58	10529f10	高A	杯A I	(17.4)	(5.5)	(5.5)	□1/4 底一節	ロクロナダ、凹形糸切、内面ミガキ後黒色処理		105-6
59	10529g7	高A	杯A	(16.6)			□1/4	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		105-7
60	10529h7	高A	杯A	(13.2)			□1/4	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		105-8
61	10529i7	高A	杯A	(15.5)			□1/8	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		105-9
62	10529j2	高A	杯A	(7.2)			底1/2	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理、付蓋台後ナダ		105-10
63	10529k2	高A	杯A	(13.6)			□1/10	ロクロナダ		105-11
64	10529l7	高A	杯A	(13.6)			□1/9	ロクロナダ		105-12
65	10529m7	高A	徳か	(13.6)	(7.6)		底一節 底	ロクロナダ、凹形ヘラケズリ、付蓋台後ナダ、底ミ、磨き跡	底面ミ、磨き跡	105-13
66	10529n7	高A	徳か		(6.2)		底	ロクロナダ、凹形ヘラケズリ、付蓋台後ナダ、底ミ、磨き跡		105-14
67	10529p7	高A	徳か	(13.4)			底一節	ロクロナダ、凹形ヘラケズリ、底ミ、磨き跡		105-15
68	10529q15	高A	杯A	(13.4)			□一節	ロクロナダ、凹形ヘラケズリ、底ミ、磨き跡		105-16
69	10529r7	高A	徳か	(15.2)			□1/8	ロクロナダ		105-17
70	10529t7	高A	徳か	(11.2)			□1/10	ロクロナダ		105-18
71	10529u7	高A	杯A	(14.8)			□1/10	ロクロナダ		105-19
72	10529v15	高A	杯A				□1/10	ロクロナダ、つまみ糸切付後ナダ		105-20
73	10729a1	高A	杯A II	15.8	5.4	4.3	□底 底	ロクロナダ、凹形糸切		107-1
74	10729b7	高A	徳か	(19.6)	(6.4)	(2.5)	□1/5 底一節	ロクロナダ、凹形糸切		107-2
75	10729c7	高A	杯A II	(9.2)	(4.8)	(2.5)	□1/9 底1/4	ロクロナダ、凹形糸切		107-3
76	10729d7	高A	徳か	(14.8)			□1/10	ロクロナダ		107-4
77	10729e7	高A	徳か	(16.4)			□1/10	ロクロナダ		107-5
78	10729f7	高A	徳か	(11.6)			□1/6	ロクロナダ		107-6
79	10729g7	高A	徳か	(13.4)			□1/4	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		107-7
80	10729h7	高A	徳か	(9.8)			□1/4	ロクロナダ、内面ミガキ後黒色処理		107-8

No.	産地・産名・産区	産種	産地	原産地(%)			産地	産種	備考	
				山口	徳島	高松				
81	1079産SW	黒A	徳	(8.8)			1/10	ロソナテ、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ	107-9	
82	1079産SW	黒A	徳	(10.0)			1/6	ロソナテ、内産ミガキ後黒色処理	107-10	
83	1079産W4	黒A	徳		5.1		徳産	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理	107-11	
84	1079産W3	黒A	徳		6.0		徳産	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理	107-12	
85	1079産7	灰	徳産	(12.7)	(7.0)	2.3	ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ	産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ	107-13	
86	1079産G3	土	羽田D	24.95			ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ	産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ	107-14	
87	1129産Belto	土	林A II	(9.3)	(5.2)	(2.8)	ロソナテ、産地未切		112-1	
88	1129産No9	土	林A II		5.0		徳産	ロソナテ、産地未切	112-2	
89	1129産No4	土	林A II	30.3	5.0	2.7	ロソナテ、産地未切		112-3	
90	1129産No3	土	林A II	19.4	4.7	3.0	ロソナテ、産地未切		112-4	
91	1129産N-Relto、1079産SW	土	林A II	(11.1)	5.45	(4.0)	ロソナテ、産地未切		112-5	
92	1129産No5	土	林A II	19.70	5.7	4.35	ロソナテ、産地未切		112-6	
93	1129産No1	土	林A II	(15.8)			ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ	内産ミガキ後黒色処理	112-7	
94	1129産No11	土	林A II		7.3		徳産	ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ	高台内産ミガキ後黒色処理	112-8
95	1129産No10	黒A	徳		7.7		徳産	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ	徳文有	112-9
96	1129産No2	黒A	徳	(14.0)	7.3	(5.25)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ	徳文有	112-10	
97	1129産7、1079産SW	灰	徳産	12.8	7.0	2.4	ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ、産地未切	産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ	112-11	
98	1129産No6	白黒	徳産	(11.3)			ロソナテ		112-12	
99	1099産SR	黒A	徳	(5.4)	(7.0)	(3.1)	ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ、産地未切		109-1	
100	1099産No2	黒A	徳	(10.4)	6.4	(5.3)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ		109-2	
101	1099産No1	軟派	林A	13.3	6.0	3.9	ロソナテ、産地未切		109-3	
102	1099産SW	黒A	徳	(6.2)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		109-4	
103	1099産SE	土	林A	(21.9)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		109-5	
104	1109産SW	土	林A	(19.6)			ロソナテ		110-1	
105	1109産W2	黒A	林A II	(11.4)	(6.0)	(4.3)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		110-2	
106	1109産W3	黒A	林A II	(12.5)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		110-3	
107	1109産W4	黒A	徳産	(14.8)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		110-4	
108	1109産7	黒A	徳産	(17.6)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		110-5	
109	1109産NW	黒A	林A	(12.6)	(3.8)	(2.8)	ロソナテ、産地未切		110-6	
110	1109産7	黒A	徳		6.8		ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ		110-7	
111	1109産7	軟派	林A II		4.5		ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		110-8	
112	1109産7	軟派	林A	(15.8)	6.6	3.8	ロソナテ、産地未切		110-9	
113	1109産7	軟派	林A	(12.5)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		110-10	
114	1109産SW	黒A	林A I	(15.4)	(8.0)	(6.0)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理	ロソナテ、産地未切	110-11	
115	1109産SW	黒A	徳		13.9		ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ		110-12	
116	1109産W1, 8, 9	土	林A	(21.3)	11.0	(11.2)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ		110-13	
117	1109産W5, 7	土	林A	(22.4)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		110-14	
118	1109産No10	土	林A	(11.4)	5.0	31.9	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		110-15	
119	1119産No4	灰	徳産	(8.0)	7.2	(6.7)	ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ、産地未切		111-1	
120	1119産NK	黒A	徳産	(15.0)	(7.0)	(2.4)	ロソナテ、産地未切		111-2	
121	1119産No1	軟派	林A	(16.0)			ロソナテ、産地未切		111-3	
122	1119産Belto	黒A	林A II	(14.2)			ロソナテ		111-4	
123	1119産No3	軟派	林A		7.8		ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ		111-5	
124	1119産No2、NW	土	林A	(29.2)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ		111-6	
125	1119産Lトロンテ	黒A	徳産	(7.0)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		111-7	
126	1119産Lトロンテ	黒A	林A II	(13.95)	6.4	4.3	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		111-8	
127	1119産Lトロンテ	黒A	徳	(6.4)			ロソナテ、産地未切		111-9	
128	1149産No1	灰	高松		徳	厚3	上野ナテ、内産ミガキ後黒色処理、産地未切	上野ナテ、内産ミガキ後黒色処理	114-1	
129	1149産No2	黒A	林A II	12.5	9.7	4.4	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-2	
130	1149産No3	黒A	林A II	(12.9)	6.6	(2.8)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-3	
131	1149産No5	黒A	林A I	(15.3)	(6.3)	(6.2)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-4	
132	1149産7	黒A	林A II	(13.5)	(6.4)	(4.0)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-5	
133	1149産No1	黒A	林A I	(16.4)	(7.2)	(5.7)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-6	
134	1149産No7	黒A	林A I	(16.2)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-7	
135	1149産7	黒A	徳	(14.4)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-8	
136	1149産7	黒A	徳	(12.2)	(6.2)	(2.3)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ		114-9	
137	1149産7	軟派	林A	(10.4)			ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ	外産ミガキ後黒色処理	114-10	
138	1149産SE	軟派	林A II	(8.6)			ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ	外産ミガキ後黒色処理	114-11	
139	1149産7	軟派	徳	(9.0)			ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ		114-12	
140	1149産W3	土	林A II	(5.55)	4.6	1.8	ロソナテ、産地未切		114-13	
141	1149産No10	土	林A II	(19.4)	(9.6)	(7.1)	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-14	
142	1149産No10	土	内産ミガキ後黒色処理	14.0			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-15	
143	1149産No14	土	内産ミガキ後黒色処理	(11.2)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-16	
144	1149産No15	土	内産ミガキ後黒色処理	(16.8)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-17	
145	1149産No11	土	林A II	(12.0)	5.8	4.1	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-18	
146	1149産No2	土	林A II	(15.0)	6.0	3.8	ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		114-19	
147	1149産No7	土	林A II	(12.7)	5.9	4.5	ロソナテ、産地未切		114-20	
148	1149産No11	土	林A II	23.5	7.2	3.95	ロソナテ、産地未切		114-21	
149	1149産No1	軟派	林A	31.4	3.8	3.8	ロソナテ、産地未切		114-22	
150	1149産No3, 4, 16	灰	高松		8.4		産地未切、内産ミガキ後黒色処理、付高台後ナテ	外産ミガキ後黒色処理、内産ミガキ後黒色処理	114-23	
151	1169産NE	灰	徳	(8.0)			ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ		116-11	
152	1169産No3	灰	徳		7.9		ロソナテ、産地未切、付高台後ナテ、産地未切		116-12	
153	1179産下	緑	三原				ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理	産地未切	117-1	
154	1179産No2	土	小原D	(15.0)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		117-2	
155	1179産No1	土	小原D	10.1	5.9	9.4	ロソナテ、産地未切		117-3	
156	1179産No1	黒A	徳		(10.4)		ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		117-4	
157	1179産W-Relto	土	小原D	(10.0)			ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		117-5	
158	1179産No9	土	徳	(26.2)			ロソナテ、産地未切		117-6	
159	1179産No10	土	徳		(8.4)		ロソナテ、産地未切、内産ミガキ後黒色処理		117-7	

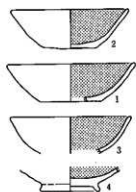
No	土地地名・住居	形状	面積(m <sup>2</sup> )	距離(m)		裏付状況	隣接	備考	備考	用途
				幅員	奥行					
160	1176N26	上	第3	(20.4)			ロ1/4	口線ナリナリ、外周ハケム、内周カキメ、ナリ		117-8
161	1176N26.01	上	河原町上層	(9.5)			口線/3	外周ハケム、ナリ、内周カキメ、裏面積ナリ		117-9
162	1176N26.02	上	第3	(10.2)			口線/3	外周ハケム、内周ナリ		117-10
163	1176N26.03	上	河原町	(12.0)			口線/4	外周ハケム、内周ナリ、裏面積ナリ		117-11
164	1176N26.04	上	第1	16.0	7.2	5.5	ロ1/2 西側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-12
165	1176N26.05	上	第1	(15.4)	(6.4)	4.2	ロ1/2 西側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-13
166	1176N26.06	上	第1	(13.0)	(6.5)	4.6	ロ1/4 西側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-14
167	1176N26.07	上	第1	(15.2)	(7.0)	5.6	11/4 東1/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-15
168	1176N26.08	上	第1	18.0	(7.0)	5.5	ロ1/4 東1/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-16
169	1176N26.09	上	第1	(12.8)	(6.2)	4.2	ロ1/4 西1/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-17
170	1176N26.10	上	第1	13.0	6.0	4.7	11/2 西側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-18
171	1176N26.11	上	第1	13.0	7.0	3.3	ロ1/4 西側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-19
172	1176N26.12	上	第1	(8.3)	8.0	7.3	ロ1/2 東側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-20
173	1176N26.13	上	第1	14.4	6.9	3.3	ロ1/2 東側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-21
174	1176N26.14	上	第1	13.4	6.6	3.1	ロ1/2 東側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-22
175	1176N26.15	上	第1	(13.4)	(8.2)	3.0	ロ1/2 東側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-23
176	1176N26.16	上	第1	18.8	7.3	2.6	11-1部欠 西側	内周ミガキ後黒色処理、内周ヘラズリ、付高台ナリ		117-24
177	1176N26.17	上	第1	(13.4)	(6.2)	2.7	ロ1/2 東側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-25
178	1176N26.18	上	第1	(16.4)			11/1	口線ナリ、内周ミガキ後黒色処理		117-26
179	1176N26.19	上	第1	(15.4)			ロ1/2	口線ナリ、内周ミガキ後黒色処理		117-27
180	1176N26.20	上	第1	(12.8)	(6.0)	3.9	ロ1/4 東1/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-28
181	1176N26.21	上	第1	16.0	7.4	5.6	11/2 東側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-29
182	1176N26.22	上	第1	(12.4)			ロ1/6 第一層 高台欠	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-30
183	1176N26.23	上	第1	12.2	5.0	3.2	ロ1/2 東側	口線ナリ、内周カキメ		117-31
184	1176N26.24	上	第1	(12.2)	(5.0)	4.3	ロ1-第一層	口線ナリ、内周カキメ		117-32
185	1176N26.25	上	第1	(13.4)	(5.0)	3.1	ロ1-第一層	口線ナリ、内周カキメ		117-33
186	1176N26.26	上	第1	(20.4)			ロ1/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-34
187	1176N26.27	上	第1	(13.0)	(6.6)	3.6	11/4 東1/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		117-35
188	1176N26.28	上	第1	(6.6)			口線ナリ	口線ナリ、内周カキメ、付高台ナリ		117-36
189	1176N26.29	上	第1					口線ナリ、内周カキメ、付高台ナリ		117-37
190	1176N26.30	上	第1	(7.4)				口線ナリ、内周カキメ、付高台ナリ		117-38
191	1176N26.31	上	第1					口線ナリ、内周カキメ、付高台ナリ		117-39
192	1176N26.32	上	第1					口線ナリ、内周カキメ、付高台ナリ		117-40
193	1176N26.33	上	第1	(14.1)			ロ1/8	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		118-1
194	1176N26.34	上	第1	12.8	5.9	3.36	ロ1/2 西側	口線ナリ、内周カキメ		118-2
195	1176N26.35	上	第1	12.5	6.0	2.9	ロ1/2 西側	口線ナリ、内周カキメ		118-3
196	1176N26.36	上	第1	(12.4)	(6.0)	(2.9)	ロ1/5 第一層	口線ナリ、内周カキメ		118-4
197	1176N26.37	上	第1	(16.2)			11/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		118-5
198	1176N26.38	上	第1	(15.5)	(7.0)	(5.5)	ロ1/2 東1/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		118-6
199	1176N26.39	上	第1	(6.2)	(4.2)	(1.5)	ロ1/10 東1/2	口線ナリ、内周カキメ		118-7
200	1176N26.40	上	第1	(27.4)			11/6	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		118-8
201	1176N26.41	上	第1	23.6	30.9	23.5	ロ1/6 1/4	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		118-9
202	1176N26.42	上	第1	(9.2)	5.0	2.5	ロ1/3 西側	口線ナリ、内周カキメ		121-1
203	1176N26.43	上	第1	(8.9)	5.5	1.33	ロ1/3 西側	口線ナリ、内周カキメ		121-2
204	1176N26.44	上	第1	8.2	4.9	1.6	ロ1/3 西側	口線ナリ、内周カキメ		121-3
205	1176N26.45	上	第1	(9.2)	(5.3)	(5.0)	ロ1/5 東1/2	口線ナリ、内周カキメ		121-4
206	1176N26.46	上	第1	(15.2)			ロ1/8	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		121-5
207	1176N26.47	上	第1	(9.3)	(5.0)	(1.8)	ロ1/2 東側	口線ナリ、内周カキメ		121-6
208	1176N26.48	上	第1	(14.5)	(6.2)	(3.7)	ロ1/4 東側	口線ナリ、内周カキメ		121-7
209	1176N26.49	上	第1	(9.9)	(6.4)	(1.7)	ロ1/12 東1/4	口線ナリ、内周カキメ		121-8
210	1176N26.50	上	第1	(8.6)	(4.1)	(2.2)	ロ1/16 東1/2	口線ナリ、内周カキメ		121-9
211	1176N26.51	上	第1	(8.9)	(4.4)	(2.0)	ロ1/12 東1/8	口線ナリ、内周カキメ		121-10
212	1176N26.52	上	第1	7.9			東1/4	口線ナリ、内周カキメ、付高台ナリ		121-11
213	1176N26.53	上	第1	(8.6)	(4.7)	(2.3)	ロ1/12 東1/2	口線ナリ、内周カキメ		121-12
214	1176N26.54	上	第1	(16.6)			11/2	内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		121-13
215	1176N26.55	上	第1	(8.8)			東1/16	口線ナリ、内周カキメ、付高台ナリ、覆け厚げ敷物あり		121-14
216	1176N26.56	上	第1	(31.4)			11/5	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-1
217	1176N26.57	上	第1	(22.0)			ロ1/6	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-2
218	1176N26.58	上	第1	(22.2)			ロ1/5	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-3
219	1176N26.59	上	第1	(20.5)			11-第一層	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-4
220	1176N26.60	上	第1	(13.4)			11/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-5
221	1176N26.61	上	第1				東1/2	内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-6
222	1176N26.62	上	第1	(11.4)			ロ1/12	内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-7
223	1176N26.63	上	第1	(9.6)			ロ1/4	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-8
224	1176N26.64	上	第1	(10.8)	(6.4)	(9.3)	ロ1/4 第一層	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-9
225	1176N26.65	上	第1	(12.2)			11/5	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-10
226	1176N26.66	上	第1	(12.8)			ロ1/4	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-11
227	1176N26.67	上	第1	(16.0)			ロ1/8	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-12
228	1176N26.68	上	第1	(22.4)			11/18	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-13
229	1176N26.69	上	第1	(13.8)	7.2	2.6	ロ1/5 西側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-14
230	1176N26.70	上	第1	(15.2)	8.8	5.0	ロ1/4 西側	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-15
231	1176N26.71	上	第1	(13.2)			ロ1-第一層	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-16
232	1176N26.72	上	第1	(12.2)			11/10	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-17
233	1176N26.73	上	第1	(14.4)	7.2	3.8	ロ1/6 東1/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-18
234	1176N26.74	上	第1	11.4	6.2	3.9	ロ1-第一層	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-19
235	1176N26.75	上	第1	(12.8)	6.8	3.8	ロ1/4 東1/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-20
236	1176N26.76	上	第1	(13.0)	6.0	3.7	ロ1/2 東1/2	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-21
237	1176N26.77	上	第1	(12.2)	(5.2)	(3.7)	11/12 第一層	口線ナリ、内周カキメ、内周ミガキ後黒色処理		122-22

No.	岸土地点・名称	種類	形状	埋没(%)			埋没の状況	埋没の状況		埋没の状況	埋没の状況	埋没の状況
				1.埋没	2.埋没	3.埋没		4.埋没	5.埋没			
230	1219N6	高A	狭		6.9		低高度	高台一部欠	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理、付合後ナテ			122-23
230	1219N6	高A	狭		6.6		高台1/8 高台3/4	付合後ナテ	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理、付合後ナテ			122-24
240	1219N3	高A	短か	(13.0)			□1/4	コソコナテ、内面ミガキ後黒色処理				122-25
241	1219N4	高A	狭	(13.0)	6.7	4.4	□1/10 高台2/3	コソコナテ、同軸糸切				122-26
242	1219N5	高A	狭	(12.4)	(6.4)	3.7	□1/4 高台2/4	コソコナテ、同軸糸切				122-27
243	1219N7	高A	狭	(11.4)	7.6	(3.9)	□1/4 高台1/2	コソコナテ、同軸糸切				122-28
244	1219N7	高A	狭	15.1	7.6	3.4	□1/2 高台5/5	コソコナテ、同軸糸切				□指定必有
245	1219N8	高A	狭	(12.2)	(6.8)	(3.7)	□3/8 高台1/4	コソコナテ、同軸糸切				122-30
246	1219N8	高A	狭	(13.6)			□1/4	コソコナテ、同軸糸切				122-31
247	1219N8	高A	狭	(7.8)			□1/8	コソコナテ、同軸糸切				122-32
248	1219N8	高A	狭	(22.3)			□1/4	コソコナテ、同軸糸切				122-33
249	1219N8	高A	狭	(13.5)	6.45	1.65	□1/3 高台一部欠	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理、付合後ナテ				122-34
250	1219N9	高A	狭	(12.4)	(5.3)	(4.7)	□1/4 高台3/4	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理、付合後ナテ				122-35
251	1219N9	高A	狭		6.7		高台一部欠	付合後ナテ				122-36
252	1219NE	高A	狭	(13.1)	(6.3)	(3.4)	□1/10 高台1/8	コソコナテ、同軸糸切				122-37
253	1219NW	高A	狭	(13.0)	(5.4)	(3.25)	□1/10 高台1/8	コソコナテ、同軸糸切				122-38
254	1219NE	高A	狭	(13.0)	(5.4)	(3.25)	□1/8	コソコナテ、同軸糸切				122-39
255	1219NE	高A	狭	13.5	6.4	3.8	□1/2 高台2/3	コソコナテ、同軸糸切				122-40
256	1219NW	高A	狭	(16.3)	11.0	23.35	ロー層 高台7/8	コソコナテ、コソコナテ、同軸糸切、付合後ナテ				122-41
257	1219NW	高A	狭	(12.2)			□1/4	コソコナテ、同軸糸切				122-42
258	1219NW	高A	狭		5.2	3.3	高台一部欠	コソコナテ、内面ミガキ後黒色処理、付合後ナテ				122-43
259	1219NE	高A	狭	15.2	7.9	3.3	□1/2 高台	コソコナテ、同軸糸切、付合後ナテ				122-44
260	1219NE	高A	狭	11.2	5.8	3.45	□1/8 高台	コソコナテ、同軸糸切				122-45
261	1219NE	高A	狭	12.15	5.2	3.3	□1/2 高台	コソコナテ、同軸糸切				122-46
262	1219NE	高A	狭	6.3	3.3		高台	コソコナテ、同軸糸切				122-47
263	1219NE	高A	狭	13.4	5.45	3.15	□1/2 高台	コソコナテ、内面ミガキ後黒色処理、付合後ナテ				122-48
264	1219NE	高A	狭	7.5			高台一部欠	コソコナテ、同軸糸切				122-49
265	1219NE	高A	狭	(23.4)			□1/4	コソコナテ、同軸糸切				122-50
266	1219NE	高A	狭	(11.0)			高台一部欠	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理、付合後ナテ				122-51
267	1219NE	高A	狭	(13.0)	6.8	(3.75)	□1/4 高台	コソコナテ、同軸糸切				122-52
268	1219NE	高A	狭	13.85	5.8	4.15	□1/4 高台	コソコナテ、同軸糸切				122-53
269	1219NE	高A	狭	16.40			高台1/4	コソコナテ、同軸糸切				122-54
270	1219NE	高A	狭	(4.0)	(4.0)		□1/3	コソコナテ、同軸糸切				122-55
271	1219NE	高A	狭	(12.4)			高台	コソコナテ、付合後ナテ				122-56
272	1219NE	高A	狭	(4.2)			高台1/4 高台1/3	コソコナテ、ナテ、付合後ナテ				122-57
273	1219NE	高A	狭	11.9	6.62	3.2	□1/4 高台	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理、付合後ナテ				122-58
274	1219NE	高A	狭				高台一部欠	コソコナテ、内面ミガキ後黒色処理、同軸糸切、付合後ナテ				122-59
275	1219NE	高A	狭	(9.75)	(4.8)	1.85	□1/4 高台	コソコナテ、同軸糸切				122-60
276	1219NE	高A	狭				高台1/3	コソコナテ、同軸糸切、付合後ナテ、裏付け用物				122-61
277	1219NE	高A	狭		8.6		高台	コソコナテ、同軸糸切、付合後ナテ、裏付け用物				122-62
278	1219NE	高A	狭	(9.7)			高台1/4	外周フェム、内面ナテ				122-63
279	1219NE	高A	狭	(17.2)			□1/8	コソコナテ、内面ミガキ後黒色処理				122-64
280	1219NE	高A	狭	(6.4)			高台1/5	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理				122-65
281	1219NE	高A	狭	(13.6)	(6.4)	(3.3)	□1-高台1/4	コソコナテ、同軸糸切				122-66
282	1219NE	高A	狭	(7.6)			高台1/4	コソコナテ、同軸糸切				122-67
283	1219NE	高A	狭	13.0	(5.5)	3.4	□2/3 高台一部欠	コソコナテ、同軸糸切				122-68
284	1219NE	高A	狭	9.4	4.7	3.0	□1/3 高台	コソコナテ、同軸糸切				122-69
285	1219NE	高A	狭	(5.1)			□1/6	コソコナテ、内面ミガキ後黒色処理				122-70
286	1219NE	高A	狭	(14.6)	(6.7)	4.4	□1/3 高台一部欠	コソコナテ、同軸糸切				122-71
287	1219NE	高A	狭		7.4		高台一部欠	同軸糸切、付合後ナテ、内面ナテ、裏付け用物				122-72
288	1219NE	高A	狭					同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理				122-73
289	1219NE	高A	狭		(5.8)		高台一部欠	内面ミガキ、同軸糸切、付合後ナテ、内面ナテ、裏付け用物				122-74
290	1219NE	高A	狭	(14.5)	6.9	3.35	□1/6 高台2/3	コソコナテ、コソコナテ、内面ナテ				122-75
291	1219NE	高A	狭	(10.6)			□1/8	コソコナテ、内面ミガキ、内面ミガキ後黒色処理				122-76
292	1219NE	高A	狭	(4.9)			高台1/3	コソコナテ、同軸糸切				122-77
293	1219NE	高A	狭	(6.1)			□1/8	コソコナテ、同軸糸切				122-78
294	1219NE	高A	狭	(9.6)	(5.3)	3.8	□1/8 高台1/2	コソコナテ、同軸糸切、付合後ナテ				122-79
295	1219NE	高A	狭		7.9		高台2/3	コソコナテ、同軸糸切、付合後ナテ、裏付け用物				122-80
296	1219NE	高A	狭	(11.5)			□1/8	コソコナテ、内面ナテ				122-81
297	1219NE	高A	狭	(9.4)	(5.0)	3.2	□1/6 高台1/2	コソコナテ、同軸糸切				122-82
298	G N3E	高A	狭	(11.0)	(6.3)	1.3	□1/3 高台1/4	コソコナテ、同軸糸切、付合後ナテ				122-83
299	G N3E	高A	狭	(21.8)			□1/4	コソコナテ、内面ミガキ後黒色処理				G-2
300	G N3E	高A	狭	(21.0)			□1/4	コソコナテ、外周フェム、内面ミガキ後黒色処理、付合後ナテ				G-3
301	G N3E	高A	狭		7.8		高台一部欠	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理				G-4
302	G N3E	高A	狭	(20.9)	(5.0)	(2.4)	□1/12 高台	コソコナテ、同軸糸切、付合後ナテ、同軸糸切				G-5
303	G N3E	高A	狭		9.92	4.3	□1-高台	コソコナテ、同軸糸切				G-6
304	G N3E	高A	狭				高台	同軸糸切、付合後ナテ				G-7
305	G N3E	高A	狭	(13.8)	5.8	(4.1)	□1/8	コソコナテ、同軸糸切				G-8
306	G N3E	高A	狭		7.0		高台	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理				G-9
307	G N3E	高A	狭	(14.4)			□1-高台	コソコナテ、内面ミガキ後黒色処理				G-10
308	G N3E	高A	狭	(13.0)			□1/8	コソコナテ、内面ミガキ後黒色処理				G-11
309	G N3E	高A	狭	(13.3)	(6.0)	(4.05)	□1/4 高台1/3	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理				G-12
310	G N3E	高A	狭	(18.38)			□1/3	外周フェム、ナテ、内面ミガキ後黒色処理				122-84
311	G N3E	高A	狭	13.1	5.7	4.45	□1-高台一部欠	コソコナテ、同軸糸切、内面ミガキ後黒色処理				122-85
312	G N3E	高A	狭	(13.2)			高台一部欠	コソコナテ、同軸糸切				G-13
313	G N3E	高A	狭	(17.4)	(7.7)	(3.26)	□1/10 高台1/4	コソコナテ、同軸糸切、付合後ナテ、裏付け用物				G-14
314	G N3E	高A	狭		(6.8)		高台1/3	コソコナテ、同軸糸切、付合後ナテ、内面ミガキ後黒色処理、裏付け用物				G-15

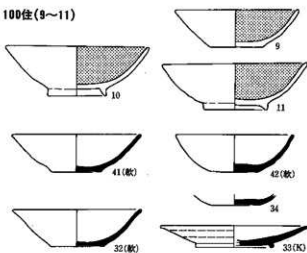


No.	機軸調定・位相	調律	調形	標準(調)		残存度	楽譜	備考	資料No.	
				口調	高低					
315	G N3RW6	調	杯B	(8.4)		楽譜1/3 裏面1/8	ロクロナテ、回転ヘラクスリ、付高台後ナテ		G-19	
316	G N3RW6	調	裏側	(10.6)		裏1/4	ロクロナテ、回転ヘラクスリ		G-19	
317	G N3RW6	調	裏A面			裏面1/4	ロクロナテ、回転ヘラクスリ、付高台後ナテ		G-20	
318	G N3RW6	調	杯A	(5.2)		裏1/2	ロクロナテ、回転糸切	内外面残存 内面付着	G-21	
319	G N3RW6	発生	台付壁			裏一部	内外面ミダキ、内面内側ナテ		G-22	
320	G N3RW6	調	杯A II	(8.4)	(3.1)	(1.75)	ロクロナテ、回転糸切		II機軸-2	
321	G N3RW6	調	杯A II		(5.3)		ロクロナテ、回転糸切、付高台後ナテ		II機軸-2	
322	G N3RW6	調	杯A II	9.45	4.3	1.7	裏面一部 裏1/8	ロクロナテ、回転糸切	内面炭化物付着 口縁部凹凸	II機軸-3
323	G N3RW6	調	杯A II	(12.30)	4.7	(3.6)	裏1/4	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核		II機軸-4
324	G N3RW6	調	杯A	(6.0)			裏1/4	ロクロナテ、回転糸切		II機軸-5
325	G N3RW6	調	杯A	(13.1)	(5.4)	(3.30)	裏1/4 裏1/4	ロクロナテ、回転糸切		II機軸-6
326	G N3RW6	調	杯A	(7.2)			裏面一部 裏面1/8	ロクロナテ、回転ヘラクスリ、付高台後ナテ、 裏し裏付け施施	黒ねり4号線	II機軸-7
327	G N3RW6	調	杯A	(13.6)	(7.2)	(2.8)	裏1/12 裏面一部 裏面1/8	ロクロナテ、回転ヘラクスリ、付高台後ナテ 裏し裏付け施施	黒ねり4号線	II機軸-8
328	G N3RW6	台座	面	(16.0)			裏1/19	ロクロナテ		II機軸-9
329	G N3RW6	台座	面I B 1	(8.5)	(7.2)	(1.45)	裏1/8 裏1/3	ロクロナテ 不づくね、裏面ナテ	かわらけ	II機軸-10
330	G N3RW6	陶器	面C	(23.0)			裏1/8	口縁部ナテ、内外面ロクロナテ	資源産	II機軸-11
331	G N3RW6	砂	小塊				口一部	口縁部ナテ、内外面ミダキ		N3RW-1
332	トレンテ	土	小塊	(16.2)			裏1/12	ロクロナテ		T-1
333	トレンテ	土	塊	(10.6)			裏1/6	内外面ナテ		T-2
334	トレンテ	土	小塊D	(13.7)			裏1/6	口縁部ナテ、外周カキム、内面ナテ		T-3
335	トレンテ	調	杯A II	(12.8)	(6.8)	3.26	裏1/4 裏2/5	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核		T-4
336	トレンテ	調	杯A II	(6.3)			裏2/5	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核		T-5
337	トレンテ	調	杯A	(9.4)			裏1/4	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核		T-6
338	トレンテ	調	杯A	(7.1)			裏1/3	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核、 付高台後ナテ		T-7
339	トレンテ	調	杯A	(8.8)			裏3/4	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核、 付高台後ナテ		T-8
340	トレンテ	調	杯A	(5.8)			裏1/4	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核、 付高台後ナテ		T-9
341	トレンテ	調	杯A	(34.9)			裏1/16	ロクロナテ、内面ミダキ後黒色結核		T-10
342	トレンテ	調	杯A		5.3		裏1/8	ロクロナテ、回転糸切		T-11
343	トレンテ	調	杯A	(16.4)			裏1/8	ロクロナテ、回転糸切		T-12
344	トレンテ	調	杯A	(15.6)			裏1/14	ロクロナテ		T-13
345	トレンテ	調	杯A	(13.0)			裏1/12	ロクロナテ、大口径回転ヘラクスリ		T-14
346	トレンテ	調	杯B	(8.4)			裏3/8	ロクロナテ、回転ヘラクスリ、付高台後ナテ	底面白粉付着	T-15
347	トレンテ	調	杯A	(8.4)			裏2/5	回転ヘラクスリ、内面ロクロナテ、静止糸切、 付高台後ナテ	底面白粉付着 高台部裏面付着 外面及び内面凸部 自然物付着	T-16
348	トレンテ	調	杯A	(10.0)			裏1/6	ロクロナテ、施施		T-17
349	トレンテ	調	杯A	(13.3)	(6.3)	2.33	口一部 裏1/8	ロクロナテ、付高台後ナテ、裏し裏付け施施		T-18
350	トレンテ	調	杯A	(12.9)	(7.4)	2.4	口1/6 裏面1/8 裏面1/4	ロクロナテ、回転ヘラクスリ、付高台後ナテ、 裏し裏付け施施		T-19
351	トレンテ	調	杯A	(14.0)	(8.0)	(3.7)	裏1/6 裏1/6	ロクロナテ、回転糸切		T-20
352	トレンテ	調	杯A	(5.2)			裏1/6	ロクロナテ、回転糸切		T-21
353	トレンテ	調	杯A	(13.0)			裏1/6	ロクロナテ		T-22
354	トレンテ	調	杯A	(13.0)	(5.8)	(3.8)	裏1/12 裏1/8	ロクロナテ、回転糸切		T-23
355	トレンテ	調	杯A	(10.8)			裏1/6	ロクロナテ		T-24
356	調	杯A II	(5.3)	(5.4)	1.6	裏1/8 裏1/8	ロクロナテ、回転糸切		機軸-1	
357	調	杯A II	(14.9)	(6.1)	5.2	裏1/6 裏1/8	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核		機軸-2	
358	調	杯A	(6.5)			裏面 裏面一部	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核、 付高台後ナテ		機軸-3	
359	調	杯A	(11.4)			裏1/2	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核	内面付着	機軸-4	
360	調	杯A II	(13.1)	(5.7)	(5.8)	裏1/4 裏1/3	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核		機軸-5	
361	調	杯A	(4.3)	(3.1)	2.3	裏1/12 裏2/3	外周ミダキ後黒色結核、内面ナテ後黒色結核、 回転ヘラクスリ、ロクロナテ、 管轄のみ自然物付着ナテ	切取面付着	機軸-6	
362	調	杯A					回転ヘラクスリ、ロクロナテ、 管轄のみ自然物付着ナテ		機軸-7	
363	調	杯A	(13.0)	(7.6)	4.0	裏1/10 裏1/4	ロクロナテ、回転糸切		機軸-8	
364	調	杯A	(12.0)	(5.3)	3.3	裏1/12 裏1/4	ロクロナテ、回転糸切	内面自然物付着	機軸-9	
365	調	杯A	(12.4)	(5.4)	3.6	裏1/8 裏1/3	ロクロナテ、回転糸切		機軸-10	
366	調	杯B	(7.8)			裏3/8	ロクロナテ、回転ヘラクスリ、付高台後ナテ	底面へり付着	機軸-11	
367	調	杯B	(7.9)			裏3/8	ロクロナテ、回転ヘラクスリ、付高台後ナテ、 裏し裏付け施施	黒ねり4号線	機軸-12	
368	調	杯A	(7.0)			裏1/4	ロクロナテ、回転糸切、付高台後ナテ、施施	内面見込部 裏面見込部	機軸-13	
369	調	杯A	(5.2)			裏1/16	ロクロナテ、回転糸切、内面ミダキ後黒色結核、 付高台後ナテ	底面穿孔状	II機軸-1	
370	調	土	小塊C	(10.3)			裏1/8	口縁部ナテ、内面ナテ		II機軸-2
371	調	杯A	(13.4)	(6.4)	3.9	裏1/8 裏1/5	ロクロナテ、回転糸切		II機軸-3	
372	調	杯A		5.4		裏面	ロクロナテ、回転糸切		II機軸-4	
373	調	杯A V 杯VI	(5.9)			裏1/4	ロクロナテ、回転糸切、付高台後ナテ		II機軸-5	
374	調	杯A	(7.0)			裏1/3 裏1/3	ロクロナテ、付高台後ナテ、裏し裏付け施施		II機軸-6	
375	調	杯A	(11.1)			裏面1/8 裏面1/8	ロクロナテ、回転ヘラクスリ、回転糸切、付高台後ナテ	東海系無垢陶器	II機軸-7	
376	調	土	塊B	(20.8)			裏1/12	口縁部ナテ、内面カキム、内面ナテ		II機軸-8
377	調	陶器	山本調	(12.5)			裏1/8	ロクロナテ、回転糸切、付高台後ナテ	東海系無垢陶器	II機軸-9

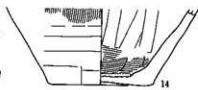
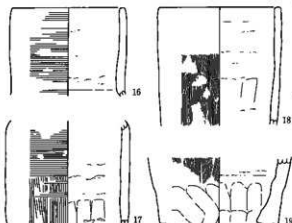
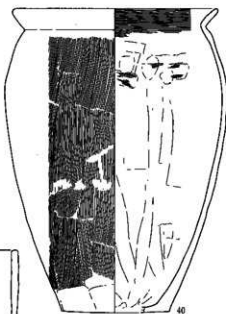
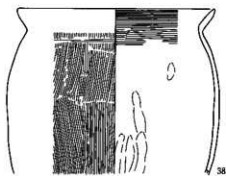
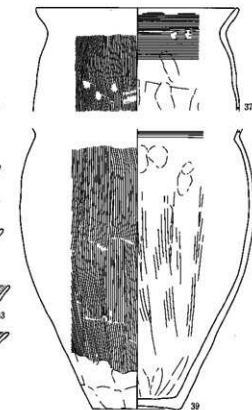
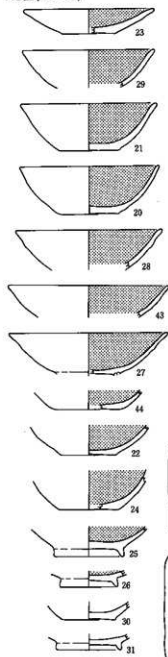
99住(1~8)



100住(9~11)

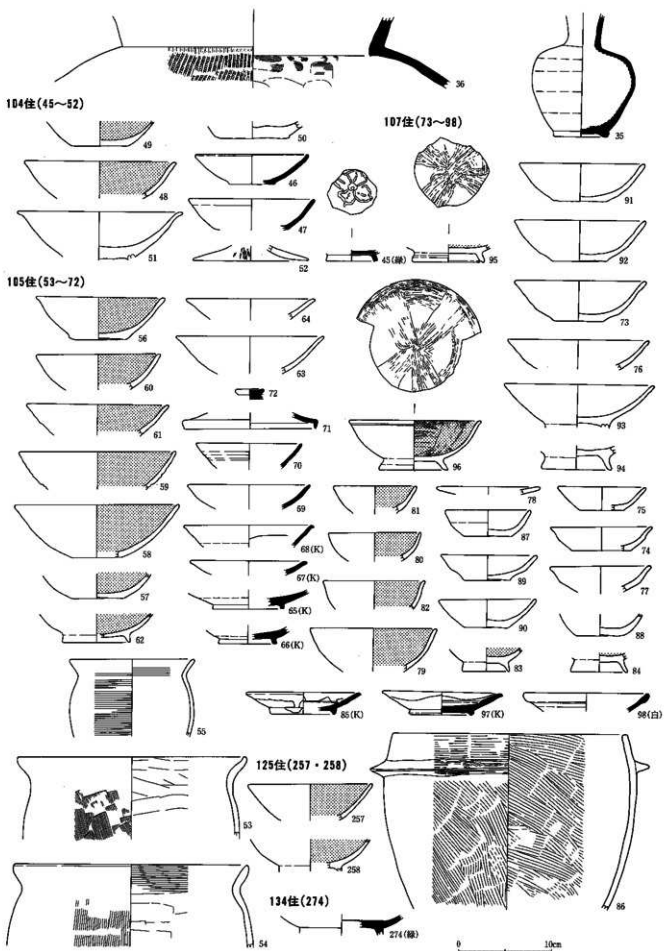


102住(14~44)



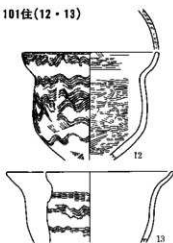
0 10cm

第14図 土器・陶磁器(1)

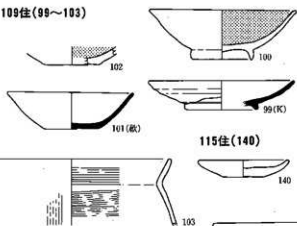


第15図 土器・陶磁器(2)

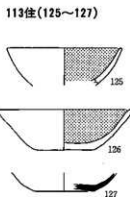
101住(12・13)



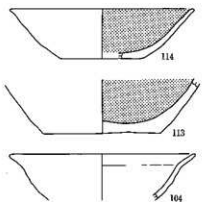
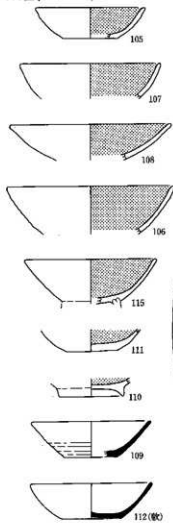
109住(99~103)



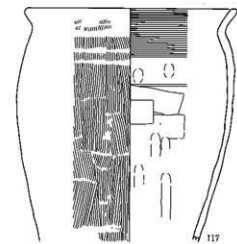
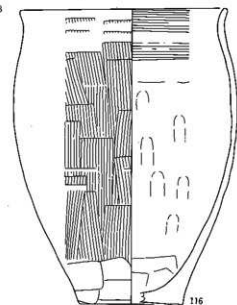
113住(125~127)



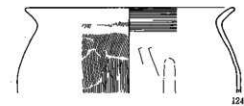
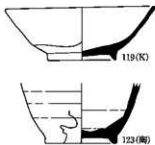
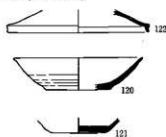
110住(104~116)



115住(140)



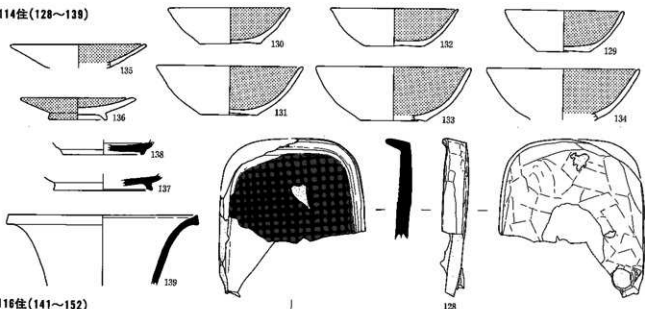
111住(119~124)



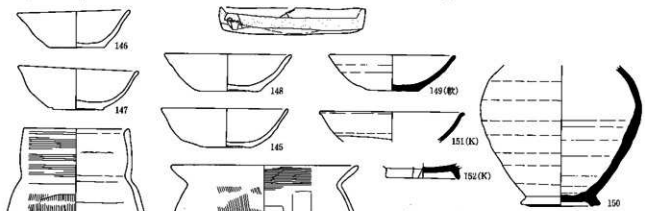
第16図 土器・陶磁器(3)

0 10cm

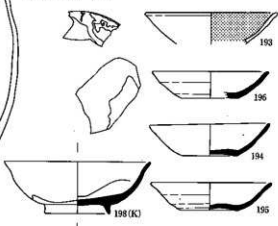
114住(120~130)



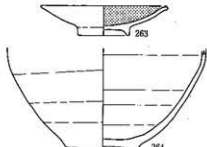
116住(141~152)



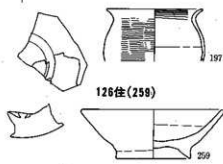
118住(193~198)



120住(263・264)



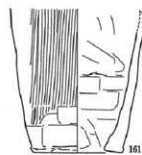
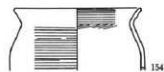
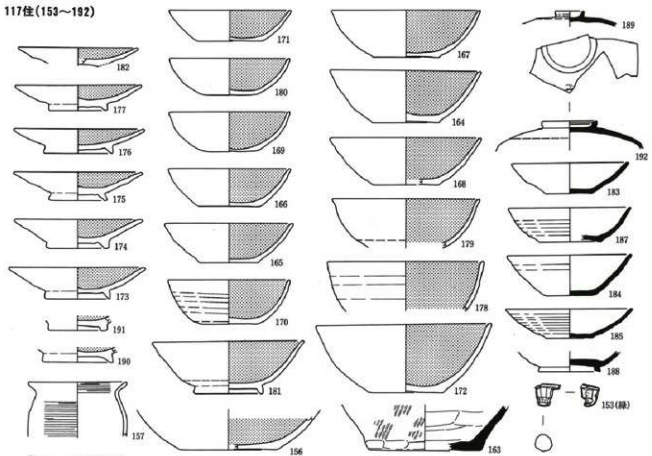
126住(259)



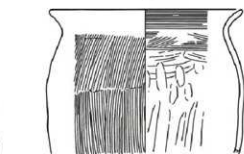
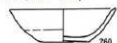
0 10cm

第17図 土器・陶磁器(4)

117住(153~192)



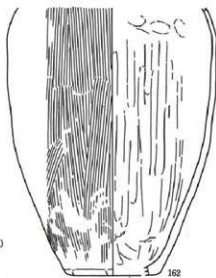
127住(260~262)



135住(275~277)



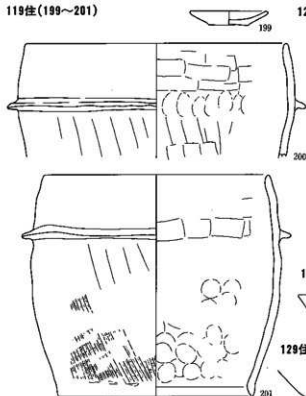
136住(278)



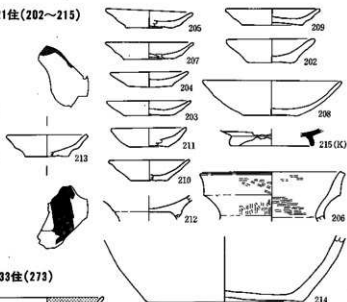
0 10cm

第18図 土器・陶磁器(5)

119住(199~201)



121住(202~215)



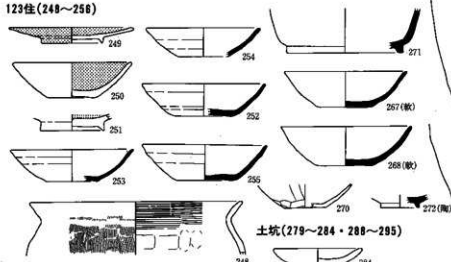
133住(273)



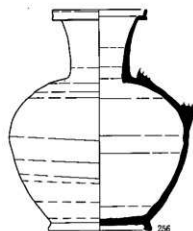
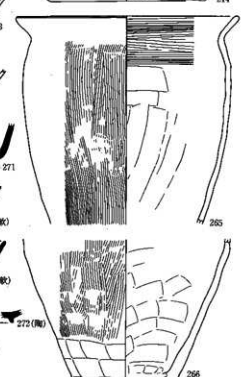
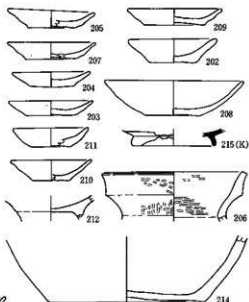
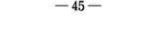
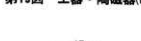
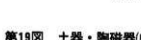
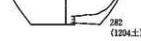
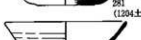
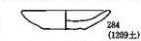
129住(265~272)



123住(248~256)



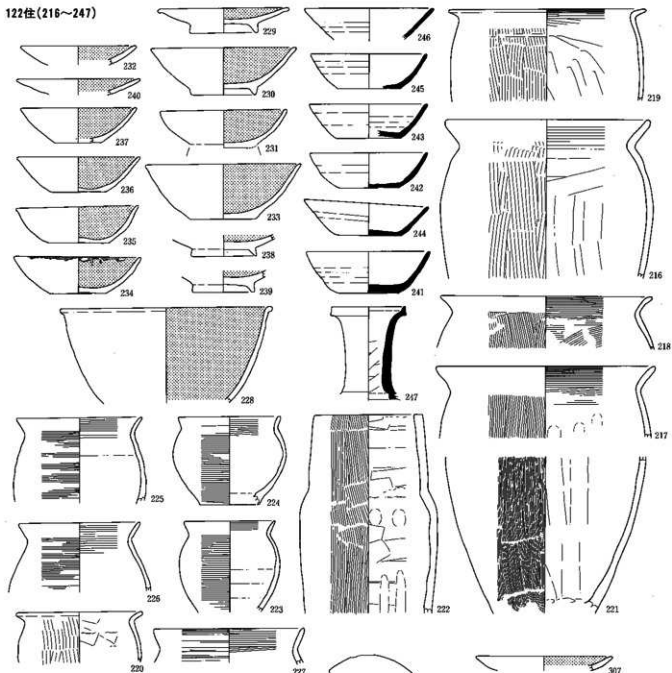
土坑(279~284・288~295)



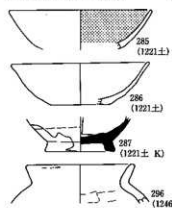
0 10cm

第19図 土器・陶磁器(6)

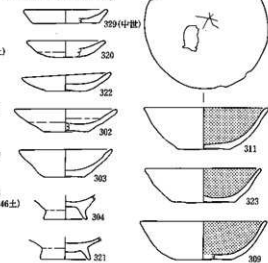
122住(216~247)



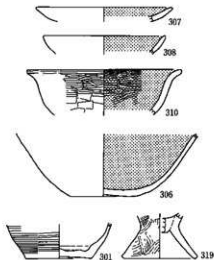
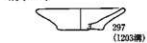
土坑(285~287・296)



グリッド(298~311)



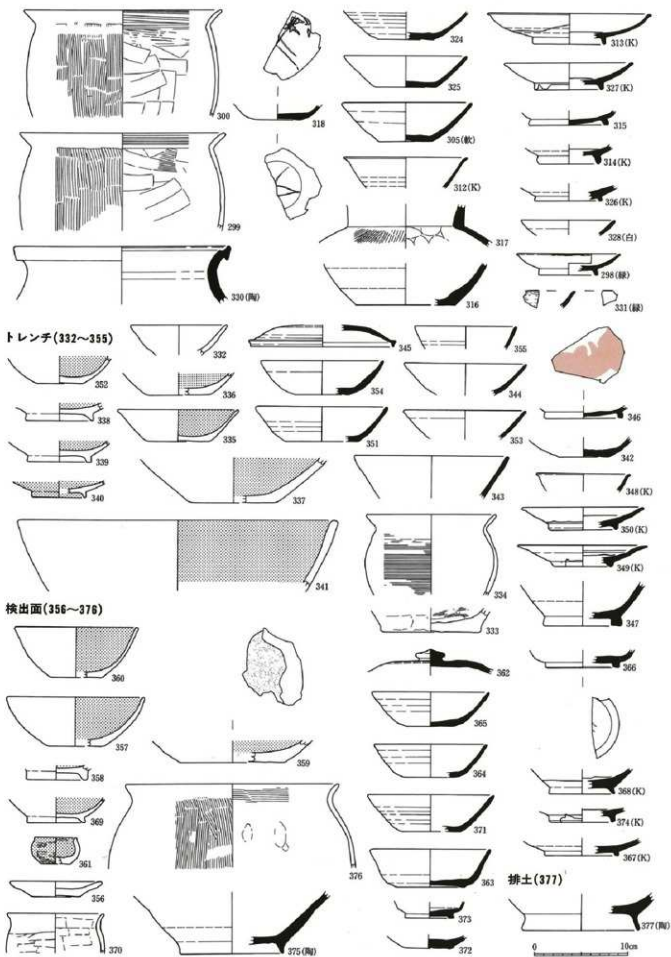
溝(297)



0 10cm

第20図 土器・陶磁器(7)





第21図 土器・陶磁器(8)

2 石器

石器群の概要

県道遺跡第12次調査では、出土した石器の型式と考えられるものから、弥生時代、古代、中世に帰属すると推定される遺物が検出されているようである。遺物検出面、石器認定基準、及び石器回収基準は不明であるものの、恐らくは所謂定形的な石器を中心として、62点の石器群が回収された(註1)。

三次元座標記録率12.9%の本石器群に対し、接合作業及び母岩識別作業を2人日実施したものの、複数個体が構成される母岩別資料は確認し得なかった(註2)。

【補註】

註1 遺物検出面が複数設定されたようであるが、調査区壁面及び遺構切り合い部の断面回収率が低いようであることから不明な点が多い。また、粗質石材素材割断系石器群及び、炉や竈等の構築材を主体とすると考えられる粗質石材素材分割割断系石器群は回収しないという調査方針で本石器群は回収されたようであるが、器種組成では自然産及び産片類の組成率は高く、石器認定回収基準についても不明であるといわざるを得ない。

註2 遺物主要諸元は遺物群、ここでは石器群が対象となるが、その回収精度、整理作業精度、及びその質量を、可能な限り簡潔に表示しようとするものである。石器を対象として考案したものであるが、その他の遺物においても適用は可能であろう。遺物主要諸元は遺物の質量及び、調査精度の数値化を試みたものである。なお、本調査における遺物主要諸元は、諸般の制約から抽出し得なかった。稀少遺構及び希少遺物の有無で決まらざるに遺跡の評価であるが、遺物主要諸元及び遺物主要諸元の集積から、調査精度及び遺跡の構成要素である遺物遺物の質量による、より客観的な遺跡の評価が可能になるものと考えられる。

【主要参考文献】

- 内閣 財 2002「土器・金属器」『堀の内遺跡』松本市教育委員会 pp9～pp13
- 太郎圭郎 2000「石器」『百瀬遺跡』松本市教育委員会 pp93～pp122
- 2000「石器」『百瀬遺跡Ⅳ』松本市教育委員会 pp44～pp49,57,58
- 2001「石器」『堀の宮遺跡Ⅰ』松本市教育委員会 pp9～pp14,pp25～29
- 2002「石器」『堀の内遺跡Ⅱ』松本市教育委員会 pp8

**遺物主要諸元**  
調査区壁面長: 調査面積の平方根を4倍して算出した。  
断面回収率: 調査区壁面長: 調査区壁面長のうち表土より遺物検出面までの断面長が作成された壁面長。  
遺構検出面2座標記録率: 遺構検出面外ならぬ遺物検出面の座標記録率。  
遺構数: 検出された遺構の数。  
断面回収率: 1本以上断面図が作成された遺構の数。  
断面写真撮影遺構数: 1枚以上断面写真が撮影された遺構の数。  
遺構切り合い部数: 遺構が切り合い部分の数。  
断面図取得切り合い部数: 1本以上断面図が作成された切り合い部の数。  
断面写真撮影切り合い部数: 1枚以上断面写真が撮影された切り合い部の数。

調査区壁面長:a	断面回収率調査区壁面長:b	h/a	調査区壁面断面回収率	%
調査面積:c	遺物検出面2座標測定点:d	d/c	測定分布密度	点/平米
遺構数:e	断面図取得遺構数:f	f/e	断面図取得率	%
断面写真撮影遺構数:g	断面写真撮影遺構数:h	h/g	断面写真撮影率	%
遺構切り合い部数:i	断面図取得切り合い部数:j	j/i	切り合い部断面図取得率	%
断面写真撮影切り合い部数:k	断面写真撮影切り合い部数:l	l/k	切り合い部断面写真取得率	%

第6表 遺物主要諸元一覧

座標記録率	62	単座標	100.0%
接合部数	0	接合率	0.0%
母一母岩別数	0	母一母岩率	0.0%
母岩別資料構成個体数	0	母岩別構成率	0.0%
母岩別(母岩別)数	0	母岩別構成個体数	0.0%
三次元座標記録個体数	8	三次元座標記録率	12.9%
遺物検出面積	66	遺物検出率	74.2%

第7表 遺物主要諸元一覧

遺構略号	遺構名
SB	住居址
SK	土坑
SP	ピット
TG	遺物集積所
IQ	グリッド
JK	検出面
SK1203	サツレンチ
TS	トレンチ
TY	掘土

第8表 遺構略号一覧

ID	出土遺構1	出土遺構2	重量(g)	石材略号	器種略号	母岩	接合
09	SB104	Hブロック	29.5	QuAn	Ws	単座	-
10	SB104	Jブロック	0.7	Ob	BC	単座	-
11	SB104	Jブロック	1.4	Ph	PP	単座	-
15	SB113	NE	72.8	QuAn	Ws	単座	-
26	SB121	覆土	1.7	Ob	RF	単座	-
28	SB123	覆土	5.8	Ob	C	単座	-
32	SK1203	NE	3.6	CsSe	PP	単座	-
34	SK1203	NE	2.4	Ob	RF	単座	-
49	TK	W地区	244.0	An	P3	単座	-
62	SB129	No.1	20.9	Cr	Bt	単座	-

第9表 実測器種構成個体属性一覧

器種略号	器種名
MS	原石
F	石核
C	割片
BC	楔状石核
RF	二次加工ある割片
MP	無彫刻痕ある割片
PP	無彫刻痕石核
P	礫
PT	礫片
PT1	礫片1類
PTC	礫片複合
P2	礫石核2類
P3	礫石核3類
Ws	礫石状心核
Bt	禁止見形石核

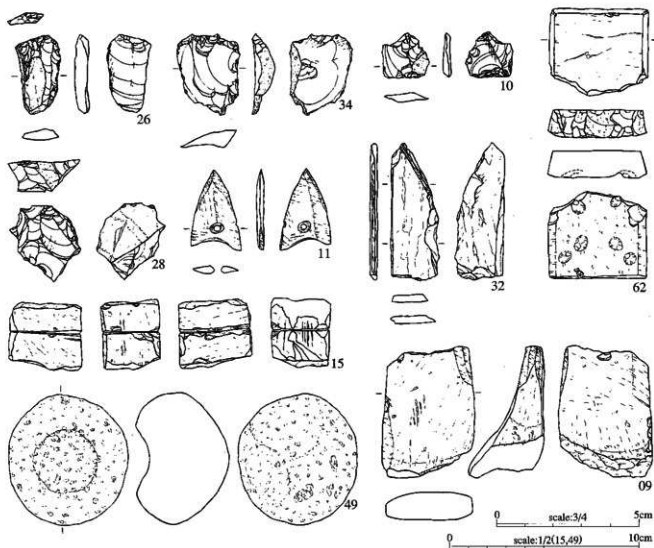
第10表 器種略号一覧

石材略号	石材名
Ob	黒曜岩
QuAn	石英質安山岩
An	安山岩
CrAs	溶岩結核岩
Di	閃緑岩
GrAp	珸花崗岩
Ps	砂岩
Sa	砂岩
MeTu	実質結核岩
Tu	結核岩
MeSi	実質結核岩
Ph	千枚岩
CsSe	結晶片岩
Qt	石英
Cr	水晶

第11表 石材略号一覧

石材略号	MS	C	F	BC	RF	MF	PP	P	PT	PT1	PTC	P2	P3	Ws	Bt	計
Ob																8
QuAn			1	1	1	3	1									2
An																9
CrAs									4	1	1					2
Di									2							2
GrAp																1
Ps																1
Sa																4
MeTu				4					6	2	4	1	1	1		18
Tu										1	1					3
MeSi					1											1
Ph																1
CsSe																1
Qt																4
Cr											2					1
計			1	6	1	1	3	1	2	15	12	7	1	2	3	61

第12表 石材単位器種組成



第22圖 出土石器

遺物1	Ob	QuAn	An	CrAs	DI	CaAp	Ps	Sa	MeTe	Tu	MeSl	Zh	CoSc	Qu	Cr	計	遺物1	MS	C	F	BC	RF	MF	PP	P	PT	PTI	PTC	P2	P3	Ws	Ru	計		
SB099																1	SB099																	1	
SB102						1								1		2	SB102									1								1	
SB104	1	1						2								8	SB104									1								1	
SB105											1	1				2	SB105																	2	
SB107																1	SB107																	1	
SB110																1	SB110																	1	
SB113																2	SB113																	2	
SB114																1	SB114																	1	
SB117												3				4	SB117																	4	
SB118																1	2	SB118																1	2
SB119																1	SB119																	1	
SB120																1	SB120																	1	
SB121	1															2	SB121																	2	
SB122																1	SB122																		1
SB123	3															3	SB123																		3
SB126																1	SB126																		1
SB129																1	SB129																		1
SK1203	1															1	3	SK1203																	3
SK1204																1	SK1204																		1
SK1223																1	SK1223																		1
SK1229																1	SK1229																		1
SK1230																1	SK1230																		1
SK1234																1	SK1234																		1
SK1243																1	SK1243																		1
SP90																1	SP90																		1
SP97																1	SP97																		1
SQ1																1	SQ1																		1
TG	2															5	TG																		5
TK																8	TK																		8
TT																2	TT																		2
TY																1	TY																		1
計	8	2	9	2	2		1	5	4	18	3	1	1	1	4	62	計	1	6	1	1	3	1	2	15	12	7	1	2	3	6	1	62		

第13表 遺構單位石材組成

第14表 遺構單位石器組成

### 3 金属器

#### 金属器の概要

県町12次調査では4面あるとされた検出面が不明であるものの、弥生時代から中世に帰属すると考えられる遺構・遺物が検出され、61点の金属器が回収されている。しかし、グリッド回収遺物は帰属層性不明、三次元座標記録による回収も著しく低い状況にあり、遺構帰属個体についても三次元座標記録のある金属器は5点に止まる。

金属器はさびに覆われ単独で出土し、古墳など特殊な遺構内の出土金属品を除いて接合関係は望めない。その接合関係も金属種によっては接合関係を認定し得る可能性はあるが、金属器の腐蝕過程の結果、崩壊した可能性が高い。よって金属器のみでは、遺構間接合・同一個体資料という共時態内における通時的関係の把握はほぼ不可能である<sup>(註1)</sup>。そのため他の遺物によって実施された遺構間土層対比を援用し、金属器における遺構間の通時的・共時的関係を把握するにとどまる。すべての遺物は調査における層準把握と遺物取り上げ方法などの調査精度の直接的影響を受けるが、金属器の場合は援用すべき遺物の整理作業方法によって良くも悪くも更に大きな影響を受ける<sup>(註2)</sup>。

本調査地点においては、金属器の回収精度が著しく低く金属器自体が遺構とは遊離し、援用すべき他の遺物でも調査精度・回収精度が著しく低いために、遺構間接合・同一個体資料という共時態内における通時的関係の把握は不可能であるため遺構間土層対比情報もなく、他の遺物とも金属器とは遊離している。よって本遺跡においては、層準・検出面等の問題は残されたままで三次元座標記録によって回収された遺物についても通時的・共時的関係は不明であり、位置情報のみ判明したものを図示するにとどめるを得ない。

#### 【補注】

- 註1 金属器の中で鉄は初狩年から遺構の年代等を決定される向きもあるが、三次元座標記録と出土層準把握が成されていない場合は遺構とは遊離し基準とはなり得ない。本調査で三次元座標記録のある鉄の点数は0点である。所謂光彫品とされる遺物についても同様である。土器の所謂完形品とされる遺物は、ある型式段階の典型として周年情報課程では重宝にあられているが、遺跡内における通時的・共時的関係の把握は検証できない仮説である。三次元座標記録と出土層準把握が成された割れているモノにこそ情報が内包されており、遺構間接合資料から通時的・共時的関係を把握することが重要である。
- 註2 援用検査には通常土器が用いられるが、現状において土器の接合作業は単なる復元作業の一環としておこなわれているものがほとんどで、資料の提示方法も土器型式が先行した住居址一括提示のみで接合情報も出土層準も不明なものもが大多数を占め、金属器の通時的・共時的関係の把握は不可能である。近年、土器による接合資料提示・分析方法も試みられているが、仮説である土器型式を遺跡内における検証作業も成されていないにもかかわらず安易使用したのばかりで、遺構間接合資料から通時的・共時的関係を把握し遺構間土層対比を実施しているものもなく、現段階では援用検査に用いるには躊躇せざるを得ない。その点検査精度の高い遺跡における石器の基本的な考古学分析から得られた情報からの援用検証は有効であると考えられる。

#### 【参考文献】

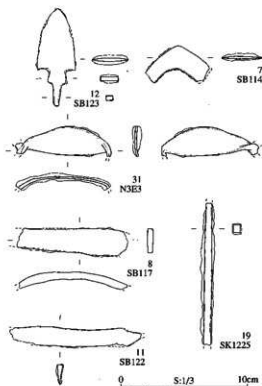
- 西部分部 1998 『遺物のライフサイクルと廃棄ブロックの形成過程』【上土層土遺跡第3次調査】綾瀬市教育委員会pp.127~141  
 内里 昭 2002 『土器・金属器』『聖の内遺跡Ⅲ』松本市教育委員会pp.9~13  
 太田幸郎 2000 『石器』『平瀬遺跡Ⅱ』松本市教育委員会pp.93~122  
 2001 『石器』『岡の宮遺跡Ⅰ』松本市教育委員会pp.9~pp.14pp.25~29

総回収個体数	61	単独率	100%
三次元座標記録個体数	6	三次元座標記録率	10.3%
遺構帰属個体数	37	遺構帰属率	60.7%

第15表 主要諸元一覧

出土遺構	金属種	釘	丸釘	紡錘車	刀子	鏃	鏡	沓	ワイヤー	不明	計
SB104	Fe	1			1			1			3
SB110	Fe									1	1
SB112	Fe									1	1
SB114	Fe									1	1
SB117	Fe			1						2	3
SB122	Fe				1						1
SB123	Fe					1					1
SB130	Cu						1				1
SB135	Fe									1	1
SK1223	Fe	3								6	9
SK1225	Fe									1	1
SK1226	Fe	5								2	7
SK1226	Cu					3					3
SK1228	Fe									1	1
SK1234	Cu					1					1
SK1242	Cu					1					1
TG	Fe	2			1			1			7
TG	Cu							4			4
TK	Fe	3	1								3
TT	Fe			1						1	2
計		14	2	2	3	1	10	2	1	26	61

第16表 遺構金属種別単位別所器種



第23図 金属器実測図

## 第4章 調査のまとめ

泉町遺跡の調査は今回で12回目を数える。以前からこの付近で平安時代の遺物が出土することは知られており、また昭和54年度以降行われている調査では、前回までに平安時代の遺構は住居址が42軒検出されている。加えてこの遺跡では緑釉陶器の出土が多く、他の概期の遺跡と比べて大きく異なる点であることも知られている。今回の調査では緑釉陶器自体の出土量は多いとはいえない。しかし、第3章で述べたように、緑彩文陶や三足盤といった、生活用品とは異なる特殊な遺物が出土する、という特色がみられる。

この泉町遺跡の性格を考えていくについて、まず調査を行った順に従って述べていくことにする。

今回の調査区は、表土を除去したところ、流路と思しき砂礫の範囲と、硬く締まった黄褐色砂質土の範囲と大きく二つに分かれた。この黄褐色土の広がる範囲には、土坑、溝といった遺構が少ないながらも存在している。これらの遺構の覆土は主として灰褐色砂質土であり、また遺物は少ないながらも、常滑産の甕とみられるものなどが検出面より確認されていることから、ここには区画溝を有する中世の遺構が存在していたと考えられるため、この面を第1面として調査を実施した。ただし、これらの存在する面は、近代以降、松本県ヶ丘高校（旧制第二中学）の建設以前に削平され、遺構面としての残存度は良好ではない。宅地などとして利用されていたようで、近代とみられる建物基礎とみられるものもいくつか確認している。

黄褐色砂質土中には、何箇所かで大形の礫を多く出土する場所が存在していた。調査開始時点においては判らなかつたが、検出及びグリッド調査の結果、それらがカマドを有する平安時代前期9世紀代の竪穴住居址であり、礫はその覆土中のものであることが明らかになってきた。また、ほぼ同じ面から平安時代後期11～12世紀の住居址も確認された。そこで、それらの存在する範囲を第2面として取り扱い、調査を実施した。また、礫の広がる範囲の中に、方形の掘り込みを確認したため、調査したところ、内部ピット中から、弥生時代中期の土器が数点出土した。わずかながら、薄川の影響を受けずに残った弥生時代の遺構が存在することが判った。

調査区内には、旧体育館の基礎が何本入り、それを利用して土層観察面（トレンチ扱い）とした。そのうちの中央トレンチの土層を基本土層とした（第24図）。東トレンチ下部、調査区北東部において、黄褐色砂質土面からピットなどの遺構が確認された。これらは、第2面とした面から50～70cm下にあたり、しかも両者の間には礫層があることから、当初はこれが弥生時代の遺構面ではないかと考えた。しかし、調査の結果これも平安時代前期9世紀代の遺構面であることが判った。結果的にこの面を第4面として扱うことになる。

第2面の下、黄褐色砂質土の面に向けて掘り下げていく過程で、礫層中にいくつか土坑の掘り込まれた面が存在することが確認された。この面を第3面として調査を実施したところ、遺物は少ないながらも北宋の渡来銭が出土した。

第3面の砂礫を除去したところ、黄褐色砂質土の比較的安定した面が比較的広い範囲で残存しているのが確認された。そこからは住居址こそ検出されないが、土坑・ピットがいくつか検出されたため、この面を第4面とした。一部のピットは建物址を構成するもので、そのうちのP<sub>1</sub>と、他のピット（P64）は、底部に礎石ともいえるべき礎盤を有するものであった。この面は比較的安定しているものの、南側と北側には薄川の大規模な流路址があることから、洪水から「生き残った」面であるといえる。事実この面には、南側の流路4からのオーバーフローと思しき浅い流路が何本か流れていたようである。

次に、以上の調査結果を踏まえて、時代ごとに触れていき、簡単に考察してみることにする。

まず弥生時代であるが、この周辺での、第1、2、3、5次調査で住居址などの遺構は確認されている。主として集落の中心は、住居址が多く確認されている2、3次調査の行われたあがたの森公園東部にあるように思われる。5次調査の際に、弥生時代の遺構の存在範囲を、県ヶ丘高校南西隅取りと捉えているようであるが、今回の調査では、さらに東側からの遺構を検出し、また遺物として、土器の他磨製石鏃なども出土し、これらはあまり磨耗していないことから、住居址は別として、遺構の広がりにはもう少し東へ広がることが判った。ただこの辺りでは、第2章第1節で述べたように、薄川の影響を非常に強く受け、大部分は削られてしまい、一部分削られずに残った部分が存在したと考えるのが妥当であろうか。

古墳時代から奈良時代については、今回の調査では遺構・遺物ともほとんどみられない。しかし県ヶ丘高校内の第5次調査では4棟、古墳時代中期末の住居址が確認されている。西北及び南西にある泉塚との関連を含め、概期の集落の中心は今回調査地では西の方にあるのではないだろうか。

平安時代前期9世紀になると、この辺りには集落が営まれるようになる。今回の調査では9世紀半ばから後半にかけての住居址が21棟発見されている。県ヶ丘高校内で行われた第4～5次調査においては、いずれも平安時代の住居

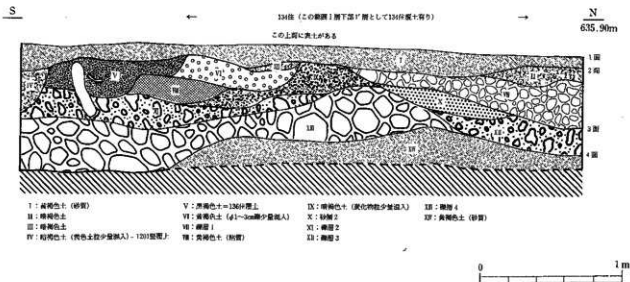
址が40棟と多く確認され、そのうち10棟は平安時代前期に属すると判断されている。また、調査は行われていないが、プール、グラウンド拡張、家庭科教室棟などの建設の際に、土師器、須恵器、灰釉陶器の他緑釉陶器が出土していることが確認されている。つまり、この果ヶ丘高校の敷地内においては、一部薄川の大规模な流路跡となっている範囲以外においては、平安時代の集落が一面に広がっていたことが想像できる。また出土遺物として、緑彩文陶、緑釉三足盤、水晶製帯、風字硯といった特殊なものがみられるため、以前に多く出土した緑釉陶器などと合わせて、この地域での大規模な集落として存在していたことは間違いないであろう。

平安時代中期10世紀に属する遺構は今回の調査では確認できない。11世紀以降になると再び集落が営まれるわけだが、この断絶の理由はやはり薄川の氾濫ではないだろうか。今回調査区の北東部分には、恐らく9世紀の段階では一段低かったのではないかとと思われる。そこが薄川の洪水の直撃を受けて埋没したのではないかと考えられ、それが1・2と3・4の間に入る砂礫層であるとみられる。調査区の中心部分には、この洪水の直撃からは免れたのであろうが、一旦集落が途切れる原因であったとは考えられる。その後11～12世紀にこの地に再び集落が営まれるが、今回この範囲で確認した住居址は5棟と少ない。

北東部分の、洪水直撃部分に堆積した砂礫層の上に、土坑が作られるようになったのは、渡来銭の存在から考えると中世とみてよいであろう。その上に、中世にもう一度大規模な洪水が起こり、調査区中心部分とのレベル差はなくなったものだと考えられる。しかし、中世はこうした洪水の常襲地帯であるためか、集落の展開地としてはあまり顧みられない地になったと考えられている。遺構も、第4次調査で溝址が確認されている程度であった。今回の調査では、そうした影響を受けながら、いくつかの遺構を検出し、遺物も得られている。確認された遺構は、中世以後の開発あるいは果ヶ丘高校の造成などによって削られてしまったと思われ、残存状態が良好であるとはいえない。しかし、1225土からは北宋からの渡来銭の他、鉄釘が多く出土している。このことはこの辺りにそれらを用いた建物が存在していたことを示す資料となるものである。とすればほぼ等間隔で造られた溝址は、それらを区画する溝であったと考えられるため、1226土でみられた銅皿の存在する時期、15世紀後半には、この辺りになんらかの遺構が存在していたことは確かだといえよう。

以上、調査手順、時代別といった観点から本調査を眺めてきたが、まだ考察しなければならぬ点は多いように思う。それについては、一読後にご提示頂ければ幸甚に存する。この果町遺跡については、現在までの調査地は11次調査を除いて、あがたの森公園、果ヶ丘高校の範囲内に限定されている。今回の調査地は遺跡範囲とすれば東端にあたる。また洪水層の下にも遺構の存在は確認されるため、今後行われるであろう調査によって、そうした点についても、明らかにできるのではないかとと思われる。

最後になりましたが、今回の調査に際して多大なご協力をいただいた松本県ヶ丘高校職員をはじめとした関係者の皆様、風土研究会の皆様、そして冬の大雪にもかかわらず作業に従事していただいた皆様方に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。



第24図 基本土層（東トレンチ西面、136住周辺部分）

## 写真図版

---



調査区遠望（東から）



調査区全景（北が上）



緑彩文陶（内側）104住

45



三足盤脚部 117住

153





236

緑釉陶器 (皿) グリッド



239

緑釉陶器 (杯-内側) 土坑1223



274

緑釉陶器 (碗) 134住



289

緑釉陶器 (杯-底部)



288

328



118住



128

風字碗 (内側) 114住

288は土1221、328はII検グリッド (白磁)  
その他の遺物はII検検出面で未図化 (青磁)



表



裏

鈎帯 129住



128

風字碗 (底部)



99住 遺物・礎出土状況 (南から)



99住 完掘 (南から)



101住 完掘 (南から)



102住 遺物・礎出土状況 (東から)



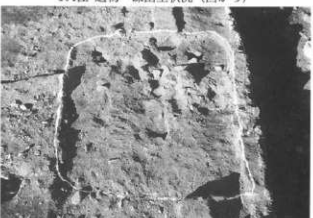
102住 完掘 (東から)



104住 遺物・礎出土状況 (西から)



104住 完掘 (西から)



107住 完掘 (南から)



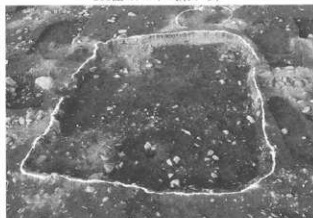
105住 完掘 (東から)



105住 カマド (東から)



109住 遺物・礎出土状況 (南から)



109住 完掘 (南から)



109住 カマド (東南から)



110住 遺物・礎出土状況 (西から)



110住 完掘 (西から)



110住 カマド (西から)



111住 完掘 (東から)



113住 遺物・礫出土状況 (西から)



114住 遺物・礫出土状況 (西から)



114住 完掘 (西から)



114住 カマド (西から)



117住 遺物・礫出土状況 (西から)



117住 完掘 (西から)



117住 カマド (西から)



116住 遺物・露出土状況（東から）



118住 完掘（西から）



119住 完掘（東から）



120住 完掘（南から）



122住 完掘（西から）



122住 カマド（西から）



123住 完掘（東から）



123住 カマド（東から）



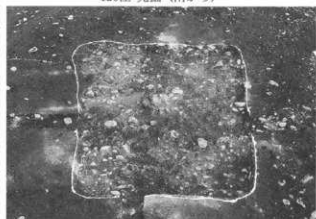
124・125住 完掘 (南から)



126住 完掘 (南から)



127住 完掘 (西から)



128住 完掘 (西から)



128・129住 完掘 (西から)



130住 完掘 (西から)



131住 完掘 (西から)



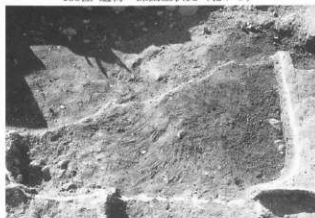
132住 完掘 (北から)



133住 遺物・礎出土状況 (北から)



134住 完掘 (西から)



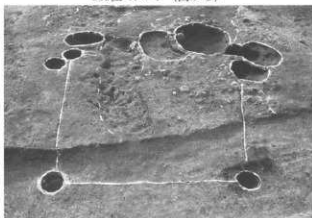
135住 完掘 (東から)



136住 カマド (西から)



137住 遺物・礎出土状況 (西から)



建物址3 (東から)



緑彩文陶出土状況



授業風景



6



9



20



10



11



33



14



15



12



101住

実例図本掲載



13

6 : 99住 12、13 : 101住  
9~11 : 100住 14~33 : 102住

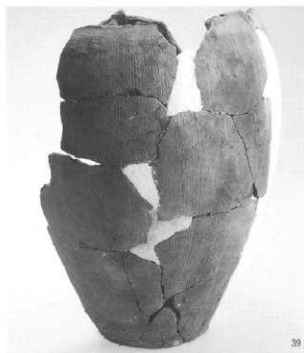




37



38



39



35



40



56



65



41



36

35~41 : 102住

56・65 : 105住



87



89



90



73



92



86



97



96



100



101



116

73~97 : 107住  
100, 101 : 109住  
116 : 110住



117, 118 : 110住    129, 139 : 114住  
 119~124 : 111住    140 : 115住  
 126 : 113住        144 : 116住

123

図版12 110、111、113、114、115、116住出土土器



148



149



172



166



171



164



173



143



142



150



174

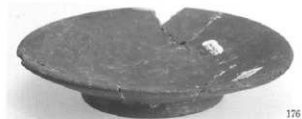
142~150: 116住  
164~174: 117住



175



229



176



188



181



155



204



186



207



208



194



200



195

155~186: 117住  
194~198: 118住  
200: 119住

204~208: 121住

229: 122住



234



259



230



260



241



261



242



256



249



224



247



216

216~247 : 122住  
249, 256 : 123住  
259 : 126住  
260, 261 : 127住



264



284



263



303



270



311



273



283



267



287



268



290



265

263, 264 : 128住      283 : 土1204      303, 311 : グリッド  
 265~270 : 129住      284 : 土1209  
 273 : 133住      287 : 土1221  
                          290 : 土1226

図版16 128、129、133住、土坑、グリッド出土土器



8



9



10



12

117住出土鉄器 8：不明、9：牵引具か、10：紡錘車

122住出土鉄器



7



11



2



16



19

住居址出土鉄器 2：104住出土刀子、7：114住出土不明品、11：122住出土刀子

土坑出土鉄器  
16：1222土出土不明品  
19：1225土出土不明品

17



18



50



51



52

1223土出土鉄器 17：不明品、18：釘、50：釘、51：釘、52：不明品



13



21



22



23



25



26



30



34



35



48

出土銭貨 13：130住出土郡寧元寶、21：1226土出土郡寧元寶、22：1226土出土元符通寶、23：1226土出土不明錢、25：1234土出土郡寧元寶  
26：1242土出土明道元寶、30：グリッド出土太平通寶、34：グリッド出土聖宋元寶、35：グリッド出土聖宋元寶、48：グリッド出土聖宋元寶



県町遺跡緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	あがたまちいせき12きんきゅうはつつちょうさほうこくしよ							
書名	県町遺跡Ⅱ緊急発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	№165							
編著者名	澤柳秀利・内畑 園・太田圭都・清水 究							
編集機関	松本市教育委員会 (松本市立考古博物館)							
所在地	〒390-8620 松本市丸の内3番7号 (〒390-0823 松本市大字中山3738番地1・Tel0263-86-4710)							
発行年月日	平成15年3月20日 (平成14年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あがたまち 県 町	あがたまち 長野県松本市 県 2丁目1-1	20202	161	36度 14分 45秒	137度 59分 54秒	20011119~ 20020325	1,200	松本県ヶ丘高校体育館 建て替えによる
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
県町	集落跡	弥生  古墳  奈良 ～平安  中世	竪穴住居址 土坑 ピット 竪穴状遺構 溝址 流路址 集石	37軒 49基 69個 2基 5条 4条 3ヶ所	弥生土器 石器 (磨製石鏃)  土師器  土師・陶磁器 (土師器・須恵器・ 灰釉陶器・緑釉陶器・緑彩文陶・ 青磁・白磁・常滑焼・陶硯) 金属製品 (釘・刀子・紡錘車・ 弓引具・鉄貨・不明品) 石製品 (銚帯・磨製石鏃)	薄川の氾濫の影響を強く 受けながら存続した平安 時代前期の集落址を鑑認 した。緑彩文陶・緑釉三 足盤・水晶製銚帯を出土 する住居址もみられた。 また、一部であるが弥生 時代の遺物も出土してい る。		

松本市文化財調査報告 №165

松本市県町遺跡Ⅱ

— 緊急発掘調査報告書 —

発行日 平成15年3月20日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620 長野県松本市丸の内3番7号

印刷 アサカワ印刷株式会社

